翻訳

アダム・スミス『道徳感情論』第Ⅰ部「行為の適切さについて」

山本陽一（訳）

訳者はしがき

以下は出版社と編者の承諾を得て Adam Smith (2002) *The Theory of Moral Sentiments*, Knud Haakonssen (ed.), Cambridge University Press, pp. 11-77 を翻訳したものである。

本書全体の邦訳については、米林富男訳『道徳情操論』（一九六九年、未来社）、水田洋訳『道徳感情論』（二〇〇三年、岩波書店）を参照してほしい。本稿も上の先行業績に多くを負う。村井章子・北川知子訳『道徳感情論』（二〇一四年、日経ＢＰ）も参照した。

翻訳にあたり、原文にないが、訳者が本文に付加した諸点について。①各パラグラフに改行はないが、適宜これをほどこした。②引用符号「　」に相当するものは原文にないが、文意を明確にするため使用した。／や――についても同様である。③［　］内の語句は訳者の挿入である。

四〇

脚注について。アラビア数字は編者の、アルファベットはスミス自身の注を示す。

本書のタイトルと第Ⅰ部の目次は以下のとおり。

『道徳諸感情についての理論。あるいは、人間が、まずは隣人のふるまいと人柄について、そのあとわが身のふるまいと人柄について、自然に下す判断の基底にある諸原理を分析する一論考』

第Ⅰ部　行為の適切さについて。三つのセクションから構成
セクションⅠ　適切さの感覚について
第一章　共感について
第二章　相互に共感することから生ずる喜びについて
第三章　わたしたちは、他人の心の動きがわが胸の心の動きと協和をなすか、不協和をなすかという事実によって、他人の心の動きが適切であるか、不適切であるかを判定するが、その際の手法について
第四章　承前
第五章　いつくしまれる美徳と仰ぎ見られる美徳について
セクションⅡ　適切であるといってよい水準は、情念の違いに応じてそれぞれ定まるということ
序論
第一章　肉体から湧き出る情念について
第二章　想像力に付着した特定の嗜好ないし習慣から湧き出る情念について
第三章　人といがみあう情念について
第四章　人とむつみあう情念について
第五章　私事にかまける情念について
セクションⅢ　世人が行為の適切さについて下す判定に、順境と逆境が及ぼす効果について。また、順境にいるほうが、逆境にいる場合よりも、世人から是認をすんなりと得られる理由について

第一章　わたしたちが悲しみによせる共感は、喜びによせる共感よりも概して生々しい感懐であるのに、通常、それは主たる当事者が自然に味わう激しい情念には遠く及ばないということ
第二章　野心の起源について。また、身分地位の区別が生まれてくる原因について
第三章　わたしたちの道徳感情の腐敗について。それの原因は、金持ちと権門を賞賛する一方、貧しくうらぶれた生活条件の人たちを見下し、あるいは無視するという上記の心理的習性である。

第Ⅰ部　行為の適切さについて。三つのセクションから構成

セクションⅠ　適切さの感覚について

第一章　共感について

1　人はどんなに私事にかまけるものだと思われていようと、人間の自然本性にはある種の原理がまぎれもなく有って他人の運勢に関心をもたせたり、他人の幸福を自分にとってなくてはならないものに変えたりします。けれども、そのとき他人の幸福から汲み取るものは、それを見ることから得る喜びのほかに何もありません。

この種の原理としては、身につまされるとか、いたわしいといった情動があり、これは、わたしたちが他人の不幸を目にしたり、その様子をとても鮮やかに心にいだく心境になったりして、人の不幸を案じて味わう感情です。

わたしたちは、他人の悲しみから悲しみを汲み取ることがよくあります。このことは、あまりにも明白な事実で、ことさら事例をあげて証明するまでもありません。思えば、この感情は、人間の自然本性に元来そなわるほかのどんな情念とも同じく、けっして有徳で情け深い人だけにそなわるのではありません。もとより、そんな人たちは、おそらく他人の悲しみをきわめて繊細な神経で感じることができますが、極悪人、社会の法を踏みにじっていささかも意に介さぬ冷血漢でさえ、この感情をすっかりなくしているわけではありません。

2　わたしたちは、他人が感じることを直接そのまま経験しませんから、他人がどんなふうに心を動かされているかということに思い至るには、「自分自身が同様な境遇にいるとすればどのように感じるだろうか」と想像してみるほかありません。

わたしたちの同類が拷問台で苦しんでいても、わたしたち自身がくつろいでいるかぎり、感覚器官は、彼をさいなむ苦しみをわたしたちに教え伝えることはけっしてありますまい。感覚器官は、わたしたち自身の身柄を越えてわたしたちの意識を広げたことはありませんし、そうする力をもちません。ですから、苦しむ同類の感懐の内実について、わたしたちが少しでも心に像を作りあげるには、想像力によるほかありません。

想像力がどんな方法でわたしたちを他人の胸中に思い至らせるかといえば、「わたしたちが彼の状況にいると仮定するならば、自分の胸中はどんなだろうか」ということを自分の意識に映し出すことによってであり、これ以外の方法ではありません。

わたしたちの想像力が写し取る先の原像は、自分自身の感覚器官に刻印された像だけであって、彼の感覚器官にやどる像ではありません。わたしたちは、想像力によって、わが身を彼の境遇におき、同じ責め苦にことごとく耐え忍ぶわが身の像を心にいだき、いうなれば彼の身体のなかに入り込んでいき、いささかなりとも彼と同一の身柄になり、つぎに、彼の感懐を表す何らかの観念を形成し、すると、彼の胸の内に比べると強さでは劣るがどこか似ている感情を味わうまでになります。[1] 彼の苦悶は、こうしてわたしたちに親しく思い描かれ、わたしたちがそれを汲み取って自分自身のものにしてしまうと、ついにはわたしたちの心を動かし始め、そうなるとわたしたちは彼の心情を思ってびくびくし、ガタガタ震えるのです。

思えば、どんな苦痛や辛酸であれ、現実にそれをなめているときにはあふれんばかりの過剰な悲しみを掻き立てられます。しからば、苦痛や辛酸をなめているところを心にいだいたり・想像したりするときにも、現実にそうである場合と同じ悲しみを多少とも掻き立てられます。そして、その悲しみの強弱は、こうして心にいだかれた像が鮮明であるか、それとも色褪せているか、その度合いに比例します。

3　これこそ、他人の不幸を案じるわたしたちの同類感情の源泉であるということ、つまり、「苦境にあえぐ人との間で、架空の話として立場を取り替えるからこそ、わたしたちはその人の心情を心にいだいたり、その心情によって心を動かされたりするよう

になる」という命題は、その内容だけからは十分に明白だと思われなくても、一見して明らかな多くの見聞によって論証できます。

わたしたちは、他人の脚や腕が狙われ、今まさに一撃が命中するところを見ると、自然に縮こまり、自分自身の脚や腕を引っこめます。そして、その一撃が命中するとき、わたしたちはいささかなりともそれを感じ、被害者と同様にその一撃を痛いと思います。

観衆は、ゆるく張られた綱の上の曲芸師を見つめているとき、目前の曲芸師の所作に合わせ、また、彼の境遇にいれば自分でもするにちがいないと感じられる所作に合わせて、自然に身体をくねらせ・よじり・つりあいを保ちます。

繊細な神経と虚弱な体質の人は、大通りの物乞いがさらけ出す腫れ物やただれた傷を見ると、いかにも自分の身体の同じ部位までかゆくなったりムズムズしたりしそうだと苦情を述べます。彼らは、この無産者の惨めな暮らしを見てぞっとしますが、この感じが彼ら自身の体の中でも特にその部位に強く襲いかかる理由は、「もし自分がほんとうに眼前の無産者であるとするならば」と仮定し、さらに、「もし自分の体の特にその部位を、いま見ているような惨めなしかたで現実にわずらうとしたら」と仮定して、わが身の上に味わう苦しみの像を心にいだくからです。

このようにして心にいだかれた像の力は、虚弱な体格の人にあって、それだけで充分な力を発揮し、かゆみやムズムズした感覚作用を生み出して、先ほどの苦情となるわけです。とびきり剛健な体格の人でさえ、腫れ上がった眼を見ると自分の眼にはっきりそれとわかるほどの痛みをよく感じますが、それは上と同様の理由から生じます。どんなに屈強な人の眼も、どんなに虚弱な人の・眼以外の身体部位に比べれば、繊細さで勝ります。

4　痛みや悲しみを催す事情だけが、同類感情を呼び起こすわけではありません。[2] どんな情念でもそれが対象から主たる当事者に湧く場合、注意深い観察者ならだれもが、主たる当事者の境遇を思い、これと相似する情動を胸裏に湧き上がらせます。

（1）VII. iii. 1. 参照。
（2）I. iii. 1. 参照。

悲劇や物語の心惹かれる英雄の解放を前にした喜びは、英雄の辛酸を前にした悲痛と同じく、誠意がこもり、また、英雄の幸福によせる同類感情は、英雄の不幸によせる同類感情と同じく、いつわりがありません。英雄が、苦境にあって自分を見捨てなかった忠実な味方に感謝するとき、わたしたちはその感謝の気持ちに入り込みますし、他方、英雄が、自分を負傷させ・捨て置き・だました不実な反逆者に憤るとき、わたしたちはその憤りに心から歩調を合わせます。人間の心にやどる情念がどんなものでも、それを見る局外者の情動は、苦しむ当事者の事情をわが身に親しく思い描くことによって想像する相手の感情に、いつだって共振共鳴します。

5　「あわれみ」や「いたわり」は、他人の悲しみによせられる同類感情を表示する専用の語です。「共感」は、おそらく元を正せば、上の語と同一の意味であったでしょうが、しかし今では、どんな種類の情念によせられる同類感情を表示するのに使われても大して不適切な感じはしません。

6　しかるべき情動が他人にやどるのを目にすると、それだけで共感感情が湧き上がると思われることがあります。一人の人間から別の人間へと、情念が瞬く間に移動して溶け込み、しかも、その情念を主たる当事者に掻き立てた原因について何も知らないうちに、そうした移入が起こると思われる場合があります。たとえば、悲痛と歓喜は、人の表情や動作に強く表されると、即座に観察者の心を動かし、似たような痛々しい情動や心地よい情動を、いささかなりとも感じさせます。にこにこしている顔は、だれしもそれを見ると、心が弾む対象であり、他方、悲しみに暮れる顔は、心がしぼむ対象です。

7　しかし、上記のことは、どんな情念にも普遍的に当てはまるわけではありません。ある種の情念については、それが表現されても共感感情のかけらも掻き立てず、それどころか、その情念を引き起こした原因について知らないうちは、それが表現された結果、かえってわたしたちはその情念に嫌気を催し、怒りを炸裂させます。わたしたちは、腹を立てている人のたけり狂った態度をみると、その人が敵視する相手よりもその人自身に対していきり立つ傾向があります。わたしたちは、その人が腹を立てている原

因を知らないので、彼の事情をわが身に親しく思い描くことができず、その原因が掻き立てる情念と似たような像を心にいだくことができません。一方、彼が腹を立てている相手方の境遇がどのようなものであるか、また、その相手方があんなに逆上した敵対者からどんなに激しい暴力をふるわれる危険に陥っているかということは、はっきりわかります。ですから、わたしたちは、たちまち相手方の恐怖や憤りに共感し、即座に相手方に加勢してやって、まこと大きな危険の元凶と映る人物に立ち向かいたいと、つい思ってしまいます。

8　悲痛と歓喜が、まさしくその外見だけで、これと相似する情動を多少とも湧き立たせるとすれば、その理由は、良き運勢あるいは悪しき運勢の人に表れた悲痛や歓喜を見て取ると、その外見から彼にふりかかった運勢について典型的な一般的観念を示唆されるからです。この一般的観念さえあれば、悲痛と歓喜は、小さな影響ならば、なにがしかわたしたちに及ぼすことができます。

悲痛と歓喜の効果は、その情動を感じる本人の身柄で終結しますから、これらの情動が表明されても、「この本人とは別に、わたしたちに気がかりな、本人とは利害の対立する人物がいる」という考えを示唆しません。この点で憤りが表明される場合とは違います。

したがって、良き運勢や悪しき運勢を表す一般的観念は、その運勢に出くわした個人への関心をなにがしか生み出しますが、他方、立腹の原因を表す一般的観念は、腹立たしい扱いを受けた人の怒りによせる共感を掻き立てません。自然は、わたしたちに「憤りのなかに入っていくときには一段と尻込みし、その原因について知らないうちは、むしろ叱られる人に加勢して憤りに立ち向かいなさい」と教示するように思われます。(3)

9　他人の悲痛や歓喜によせる共感でさえ、その原因について知らないうちは、いつだってきわめて不完全です。泣き言が一般的に語られる場合、それは、苦境にあえぐ人のうめきの表現にほかならないのに、そこから生まれてくるのは、思わず共感するとい

(3) I. ii. 3. 参照。

う心理も若干はありますが、むしろ、当人の境遇について探りたいという好奇心であって、傍目にもはっきりわかる現実の共感感情ではありません。わたしたちが尋ねる最初の質問は、「あなたの身に何が起こったのですか」というものです。これに回答があるまで、わたしたちは相手の非運についてぼんやりした観念しか持たないのでムズムズし、その感じは、相手の非運をあれこれと憶測して神経をすり減らすためにますます募りますが、わたしたちの同類感情はあまり強くありません。

10　したがって、共感感情が湧き上がるのは、情念に目を向けるからというよりも、むしろ、その情念を掻き立てる境遇に目を向けるからです。わたしたちは他人を前にして、その当人自身にはまるで感じる能力がないと思われる情念を感じることがあります。なぜなら、当人の置かれた現実から彼の胸には情念が湧かなくても、わたしたちは当人の状況にわが身を置くと、想像力が働いてわが胸にその情念が湧くからです。あつかましく粗暴にふるまう当人は、自分ではその態度が不適切であるとまるで感じていない様子なのに、わたしたちはそんな他人を前にして顔を赤らめます。そんなことが起きるのは、「もしわたしたちがあんなにも無定見にふるまったとすれば、自分ならどんなに慌てふためくことか」と感じずにはいられないからです。

11　人間の境涯は、いつか衰え死なねばならないということであり、このために避けられない災厄は多いのですが、その中でも、理性を喪失する事態は、情け深さがほんの一条でも閃く人にとって、比類なくおぞましいと映り、したがって、そんな人たちは、この人間の破滅のどん底を見ると、何にもまして深い哀れみをもつわけです。

しかし、そんなどん底にいる・あわれにも破滅した当人は、おそらく笑い・歌い、わが身の不幸にまるで無神経です。したがって、情け深い心がそんな対象を見て感じる苦悩は、苦境にあえぐ当人の感情を省察した結果ではありえません。観察者のいたわりは、ひとえに、「もし自分が同じ不幸な境遇に突き落とされ、また、おそらく実際はありえないが、その不幸な境遇の渦中にいながら現在の自分にそなわる理性と判断力を使ってこれを注視できるとすれば、自分ではどう感じるだろうか」と考えるところから湧き上がるにちがいありません。

12　母親が、病気の幼子のうめき声を耳にするときの、胸を締め付けられる思いはいかばかりでしょうか。子どもは病気でもだえている間、自分の感じることをことばで表現できません。母親は、わが子をさいなむ苦痛に思いをはせるとき、子どもが無力であるという現実の上に、彼女自身の意識に映し出された子どもの無力さを重ね、さらに、子の体調不全がもたらす未知の結果に対する彼女自身のおののきを結びつけます。彼女は、こうした観念をすべて駆使し、わが胸の悲しみに見合う不幸と辛酸の完全きわまりない像を形成します。

しかし他方、幼子が感じるものといえば、現在の不安だけです。それは、けっして大きな不安ではありえません。未来に関して、幼子は完全に保護されています。つまり、幼子は、ものを考えるということがなく、将来を予見する能力を持ちませんから、恐怖と心配に抗する解毒剤を備えているわけです。恐怖と心配は、人間の胸を責めさいなむ業火であって、幼子は大人になると、理性と学問によって虚しくこの業火から身を守ろうと試みることでしょう。

13　わたしたちは、死者にさえも共感します。そのとき、死者を待ち受ける畏怖すべき来世のできごと［最後の審判］が、死者の身の上からすれば本当は重要であるのに、わたしたちはこれを見過ごして、おもに自分の感覚器官を強く刺激する、死にまつわる諸事情に心を揺さぶられます。けれども、わたしたちの共感は、死者の幸福に何の影響も与えることができません。わたしたちが死者を悲惨だと考えるのは、太陽の光を奪われ、人生と語らいから遮られ、冷たい墓穴に置かれ、腐敗するにまかされて土中の蛇やトカゲの餌食となり、現世ではもはや一顧だにされず、ほどなく最も親しい友人縁者の親愛の情さえ枯れ果て、ほとんど彼らの記憶にも名をとどめなくなるからです。

たしかに、わたしたちは、こんな身の毛のよだつ災厄に見舞われた人たちのことを案じていくら深く感じ入っても足りない、と想像します。死者が皆から忘れ去られる危険に瀕しているときだからこそ、わたしたちの同類感情は、ますます死者への捧げものとしてふさわしいと思われ、また、わたしたちは、自分自身の不幸を埋めるため、彼ら亡きあとの記憶に何の役にも立たない名誉を贈り、死者の非運の心ふさがる思い出を無理やりに生かし続ける努力をします。わたしたちの共感が死者には何の慰めにもならないことは、死者の災厄をいっそう重くする条件であると思われ、「わたしたちのなしうる一切は何の役にも立たないのだ。死に

四七

は至らないほかの辛酸ならば何であれ、友人のお見舞い・愛情・悲嘆によって当人の心は軽くなるのに、死んでしまえば何ら慰められようがない」と考えることは、死者の不幸についてわたしたちがいだく感覚を沸き立たせるばかりです。しかし、死者の幸福が、死者にまつわるこんな事情によって何の影響も受けないのはまったく確かであって、こんな事情を思い浮かべたところで、死者は深く眠って休息から目を覚ますことはありません。

以上の観念は、死者の置かれた条件に事寄せて空想が自然に語るわびしく果てしない憂鬱を示しており、ひとえに以下のような経路から湧き上がります。すなわち、死者の身の上に起こった変化の上に、わたしたち自身の意識に映し出されたその変化を重ね合わせ、つぎに、わが身を死者の境遇に置き、つづいて、妙な言い方ですが、生きている自分の魂を、魂が抜けた死者の遺体のなかに住まわせ、そうしておいて、この境遇にあるわたしたちの情動はどのようなものだろうかと心にいだいてみるのです。

空想から生み出されるまさにこの幻影のせいで、わたしたちは自分が腐敗分解していくことを予見してまこと恐ろしくなり、また、死んでしまえば死にまつわるそんな事情は何の苦痛ももたらさないのに、生きている間はその事情を頭に描いて惨めな気分になるわけです。そしてここから、人間の自然本性にそなわるきわめて重要な原理のひとつが湧き上がります。それは、死をおぞましいと思う気持ちです。これは、幸福に対する劇しい毒薬ですが、世人の不正義を強力に取り締まるものであって、一方で当該個人を打ちひしぎ、気を滅入らせながら、他方でともに暮らす社会の人々を防衛・保護します。

第二章　相互に共感することから生ずる喜びについて

1　しかし、共感を引き起こす原因が何であろうと、また、共感感情がどれほど掻き立てられようと、他人がわたしたちの胸裏の情動にすっかり同類感情をよせてくれる事実を認めるとき、これほどうれしいことはありませんし、また、他人が逆の態度を見せるとき、これほど心痛むことはありません。

自己愛にしかるべく小細工をほどこしてそこから性懲りもなく感情の一切を演繹する論者は、そんなうれしさや心の痛みを説明する際に彼ら自身の主義に従い、自分でも筋が通っていると信じて疑いません。[4] 彼らのいうところでは、人間は自分が非力で

他人の助けが必要だと自覚しているので、わが胸の情念を他人が汲み取ってくれるのを察知すると、他人からきっと助けがあると思っていつでも悦に入り、反対の態度を察知すると、他人からきっと反発があると思っていつでも悲痛な気持ちになるというのです。

しかし、この快楽にしろ苦痛にしろ、それが感じられるのはいつだってまこと即座のことであり、ごく些細な場面であることが多いのですから、それがあんなふうに自己利益を謀る算段から湧き出るはずがないことは明らかだと思われます。たとえば、ある人が一座の気をほぐしてやろうと努めたあと、見回して自分の冗談を笑うのが自分だけであることに気づくとき、みっともなくて気が滅入ります。逆に、一座がおかしがってくれるのは、彼にとってずいぶん心地よく、彼は、一座の感情とわが胸の感情との共振共鳴を最高の喝采であるとみなします。

2　一座の喜びに共感することで彼の感じるおかしさには躍動感が付け足されるとしても、そのとき味わう喜びのすべてがこの躍動感から湧き上がるとは思われませんし、また、この喜びを得られないとき味わう苦痛のすべてが、その喜びを得られず残念だという失望感から湧き上がるとは思われません。もっとも、ある程度はその喜びがそんな躍動感から湧き、その苦痛がそんな失望感から湧くのは確かですが。(5)

わたしたちは、自分ひとりではもはや楽しみを見つけられないほど繰り返し読んだ本や詩でも、それを仲間に読んでやるときには相変わらず楽しいと感じることができます。その仲間にとってその作品は目新しいので魅力に満ちており、わたしたちはそれが自然に彼の心に掻き立てる驚嘆と賞賛に入り込んでゆきますが、もとより、その作品がわたしたちに驚嘆と賞賛を掻き立てることはもはやできません。わたしたちは、作品が呈示するどんな観念に思いをはせるときでも、自分自身の心に映し出す光でなく、むしろ、仲間の心に映し出す光に照らすのであり、すると、こんなふうに仲間の感興がわたしたちの胸の感興を鮮やかによみがえら

（4）スミスはVII. ii. 4. でBernard Mandevilleについて、VII. iii. 1. でトマス・ホッブズについて論じているのでそれを参照のこと。また、Joseph Butler, *Fifteen Sermons*, Vおよび David Hume, *Inquiry Concerning the Principles of Morals*, V. 5-6, IX. 5-7, & App. 2と比較のこと。

（5）I. iii. 1. 9. 参照。

四九

せ、わたしたちはそれに共感して愉快になります。逆に、仲間が作品に興じるように見えなければ、わたしたちはくよくよし、それを彼に読んでやる喜びはもはや感じられません。

冒頭の例にも同じことが言えます。たしかに、一座がおかしがってくれると、わたしたち自身のおかしさは鮮やかによみがえりますし、一座が黙り込んでしまうと、わたしたちはがっかりします。しかしです。このように躍動感が付け足されるか否かは、わたしたちが仲間のおかしがる様子から喜びを引き出したり、仲間の沈黙から苦痛を感じたりする一助になるとしても、そんな喜びや苦痛の唯一の原因では断じてありません。その一方、他人の感情とわたしたち自身の感情のこの共振共鳴が原因で生ずると映る快楽、あるいは、そんな共振共鳴の欠如が原因で生ずると映る苦痛は、こんなふうに躍動感の有無からは説明できない快苦です。

たしかに、友人がわたしの歓喜によせて表明する共感は、わたしの歓喜を鮮やかによみがえらせることによってわたしを喜ばせるかもしれません。しかし、友人がわたしの悲痛によせて表明する共感は、わたしの悲痛を鮮やかによみがえらせる効果しかもたないとすれば、わたしに何も与えてくれないでしょう。けれども、共感は、歓喜を鮮やかによみがえらせ、悲痛を軽減します。共感が歓喜を鮮やかによみがえらせる方法は、満足感のもう一つの源泉を贈ることであり、共感が悲痛を軽減する方法は、そのとき受け入れることのできるほとんど唯一の心地よい感懐を胸のうちにそれとなく沁みこませることです。

3　そういうわけですから、以下の事実があることを考察するのがよいでしょう。わたしたちは、心地よい情念よりも心地悪い情念を友人に語り伝えたいという焦燥感のほうが、格段に切実であるということ、わたしたちは、友人が心地よい情念によせてくれる共感よりも、心地悪い情念によせてくれる共感から、格段に強い満足感を引き出すということ、わたしたちは、友人が心地悪い情念に共感してくれないことによって、格段に深く傷心を味わうということ、以上です。

4　不運な身の上の人たちがその悲しみの原因を語り伝えることのできる聴き手を見つけたとき、彼らの気はどのようにしてまぎれるのでしょうか。

彼らは、聴き手の共感感情に接し、自分の背負った辛酸の一部を肩からおろすように思われ、一方、聴き手は、その重荷を彼ら

と分かち合うといっても不適切ではありません。聴き手が感じる悲しみは、彼らが感じるのと同じ種類のものであるばかりか、まるでその悲しみの一部をわが胸中に引き入れたかのように、聴き手が感じる悲しみは、彼らが感じる悲しみの重量を軽減するように思われます。

しかし、彼らは、自分の非運の顛末を語ることによって、いささかなりとも悲痛を新たにします。不運だった人たちは、その懊悩を引き起こした事情の思い出を記憶のなかに呼び覚ます。すると、彼らの涙はそれまでより速く流れ落ち、ややもすれば人目もはばからず、悲しみからくる気弱にどっぷり浸りがちです。けれども、彼らはこんなただなかで喜びを感じており、それによって傍目にも彼らの気がまぎれているのは明らかです。なぜなら、彼らは聴き手の共感感情を掻き立てるために、こんなふうに悲しみを生々しくよみがえらせ・新たにしましたが、聴き手の共感感情の甘さは、そんな悲しみの苦さを埋め合わせてあまりあるからです。

逆に、不運な身の上の人たちに与えられる侮辱として、彼らの災厄を軽々しく聞き流す態度を見せることほど残酷なことはありません。仲間の歓喜に心を動かされない様子は、礼を失するだけですが、仲間が懊悩を語るときに真剣な面持ちで聞かないのは、まぎれもなく汚らわしい不人情です。

5　愛は心地よい情念であり、憤りは心地悪い情念です。ですから、わたしたちは友人に対して、友情を汲み取って欲しいというより、憤りに入り込んでほしいと、よほど切実に思い焦がれます。

わたしたちは、自分が受けた恩恵に友人がほとんど心を動かされないように思われても、彼を許せますが、自分が受けた権利侵害に友人が無関心であると思われるならば、堪忍袋の緒を切らします。わたしたちは、感謝の念に入り込んでもらえないことよりも、憤りに共感してもらえないことに、よほど腹を立てるのです。

友人は、わたしたちの味方と友達にならずにすませることは簡単にできるのに、わたしたちと対立する相手の敵にならずにすませることはほとんどできません。わたしたちは、友人がわが味方と敵対することにめったに憤りません。もっとも、そのせいで、白々しく友人と及び腰のけんかをしてみせることはありますが。けれども、もし友人がわが敵と仲良く過ごせば、わたしたちはか

なり本気で彼とけんかをします。

愛とか歓喜といった心地よい情念は、応援してくれる快楽がなくても、心を満たし・支えることができます。他方、悲痛とか憤りといった苦々しく痛々しい情動は、共感の慰める力によって癒されることをより強く要求します。

6　どんな事件の主たる利害当事者も、わたしたちから共感されるときにはうれしく、共感されないときには心を痛め、しからば、わたしたちのほうでも、その人に共感できるときにはうれしく、共感できないときには心を痛めるように思われます。

わたしたちは、成功を収めた人のもとに駆けつけ祝辞を贈るだけでなく、打ちひしがれる人のもとに駆けつけ悼辞を捧げます。わたしたちは、相手の胸のあらゆる情念にすっかり共感できて、相手の語らいに喜びがあるのを見出すとき、その喜びは、相手の境遇に心打たれていだく悲しみの痛々しい感じを補って余りあるように思われます。逆に、その人に共感できないと感じるとき、わたしたちはいつだって心地悪く、苦痛の共感感情を味わわなくてすむのをうれしいとは思わず、むしろ、彼の不安を分かち合えないことを思い知って心を痛めます。

わたしたちは、人が大声で自らの非運をあれこれ嘆いているのを耳にし、ところが、その事情をわが胸に親しく思い描いても、そこまでの激しい結果を生み出す原因とは感じられない場合、彼の悲痛にあきれ、そこに入り込んでゆけないために、それを小心で気弱だと言います。他方、一片の小さな好運に出くわしてむやみに目出度がるとか、むやみに浮かれ調子になるという言い方がありますが、そんな人を見ると、げんなりします。わたしたちは、彼の喜びを冷たくあしらいさえし、そこに入り込んでゆけないために、それを軽薄で愚劣だと言います。冗談を聞いて笑う仲間の声の大きさや長さが、その冗談にわたしたちが認める以上の価値である、つまり、自分自身がそれを聞くとすれば笑える以上の程度であるならば、わたしたちは不機嫌にさえなります。

第三章　わたしたちは、他人の心の動きがわが胸の心の動きと協和をなすか、不協和をなすかという事実によって、他人の心の動きが適切であるか、不適切であるかを判定するが、その際の手法について

1　主たる当事者が当初にいだく情念と、それを見た観察者が共感によっていだく情動とが、完全な協和をなす場合、きっと当事者の情念は、観察者の目に正当・適切なもの、つまり、その対象に似つかわしいものとして映ります。逆に、観察者が当事者の状況を心に親しく思い描いて、当事者の情念と自分の心情は波長があわないと認定するとき、きっと当事者の情念は、観察者の目に不正・不適切なもの、つまり、その情念を掻き立てる原因に似つかわしくないものとして映ります。

したがって、他人の情念をその対象に似つかわしいものと是認することは、「わたしたちは他人の情念にすっかり共感する」という事実を認定するのと同じことであり、また、他人の情念をその対象に似つかわしいものと是認しないことは、「わたしたちは他人の情念に完全には共感しない」という事実を認定するのと同じことです。

わたしに加えられた権利侵害を憤る人が、自分の憤りとわたしの憤りは正確に同じ程度であると認定するならば、その人はきっとわたしの憤りを是認します。わたしの悲痛と同じ拍子を打つ共感感情の持ち主は、わたしの悲しみが道理にかなっていると認めないわけにはいきません。わたしと同じ詩や同じ絵画を賞賛する人が、わたしと正確に同じ程度にそれを賞賛するならば、彼はわたしの賞賛が正当であることをきっと認めるにちがいありません。わたしと同じ冗談を聞いて笑い、しかも声をそろえて笑う人は、わたしの笑いが適切であることを否定することはよもやありますまい。

逆に、こうしたさまざまな場面で、わたしが感じるような情動を感じない人、あるいは、わたしの情動と釣り合うような強さの情動を感じない人は、彼自身の感情とわたしの感情が不協和であるせいで、わたしの感情を否認せざるをえません。

わたしの敵愾心は、友人の怒りが共振共鳴できる限度を超えるとか、わたしの悲痛は、友人のこよなく心優しいいたわりが歩調を合わせられる限度を超えるとか、わたしの賞賛は、高すぎたり低すぎたりして友人の賞賛とかみ合わないとか、友人は微笑むだけなのにわたしが大声で腹の底から笑ったり、逆に、友人は大声で腹の底から笑うのにわたしが微笑むだけだったりとか、こんなすべての場合において、友人は、感情の対象に思いをはせ、翻ってその対象にわたしが心を動かされる度合いを見て取り、すると

すぐ、わたしに否認感情を浴びせるにちがいなく、それは、彼の感情とわたしの感情の不均衡が大きければそれだけ強く、小さければそれだけ弱いものです。要するに、どんな場面でも、彼の胸の感情が、わたしの感情を判定する基準・尺度なのです。

2　他人の意見を是認することは、その意見を採択することであり、また、他人の意見を採択することは、それを是認することです。もしあなたに確信を得させるのと同じ論拠がわたしを説得すれば、きっとわたしはあなたが得た確信を是認しますし、また、もしあなたに確信を得させる論拠がわたしを説得しなければ、わたしはあなたが得た確信を否認せざるをえません。要するに、他人の意見を是認しないでそれを採択するとか、採択しないで是認するといったことは、わたしには心にいだくことができません。ですから、他人の意見を是認あるいは否認することの意味合いは、他人の意見と自分自身の意見とが合致あるいは齟齬する事実を認定することにほかならず、それはだれしも承認するところです。しかし、このことは、わたしたちが他人の感情や情念を是認ないし否認する場合にも同様に当てはまります。

3　たしかに、わたしたちは、感情の間に共感も共振共鳴も起こらないのに感情を是認するように思われる場合があり、したがって、そのときの是認感情は、共感と是認が同時に起こるとき感受されるものとは違うように思われるかもしれません。しかし、すこし注意してみると、そんな場合でも、突き詰めればわたしたちの是認感情の根底には、この種の共感または共振共鳴があるということに納得がいくでしょう。

ずいぶん些細な事柄から一つ例を挙げて調べることにしましょう。というのは、そんな事柄について世人が下す判断は、間違った学問体系によって捻じ曲げられにくいからです。ある冗談を聞いて一座が笑う場合、わたしたち自身は、深刻な気分であるとか、たまたま別の対象に気をとられているとか、おそらくそんな理由から笑わないにもかかわらず、その冗談を是認し、一座の笑いをなかなか正当で適切であると思うことはよくあります。わたしたちは笑わなくても経験によって、どんな種類の座興がたいていの場合にわたしたちを笑わせられるかを知っており、この冗談がその種の座興のひとつであることを見て取ります。

ですから、わたしたちは一座の笑いを是認し、笑いがその対象に自然でふさわしいと感じますが、それは、今の気分では一座の

笑いにすんなりとは入り込めないが、大抵の場合に自分もそれに加わって腹の底から思い切り笑うことを承知しているからです。

4　同じことがほかのあらゆる情念にもしばしば起こります。たとえば、見も知らない人が道でわたしたちの横を通り過ぎ、総身に底知れぬ懊悩がはっきり表れ、わたしたちは彼が父親の訃報をいま受け取ったばかりだと告げられると、こんな状況で彼の悲痛を是認しないことはありえません。

それにもかかわらず、わたしたちに情け深さが欠けているわけではないのに、彼の激しい悲しみに入り込んでゆくどころか、彼の事情について関心が最初からほとんど起こらないことがよくあります。それは、たぶん、彼も彼の父親もわたしたちにはまったく未知の人であるとか、わたしたちがたまたま別のことにかかずらって、彼の身に起こるにちがいない様々なつらい事情を想像の中で描き出すゆとりがない場合です。

しかし、わたしたちは経験から、その種の非運が自然に掻き立てる悲しみの強さを知っており、もし彼の境遇についてくまなく仔細にわたり思いをはせる時間があれば、心の奥底から彼に共感することはまちがいないと知っています。その共感が現実には起こらない場合でも、彼の悲しみを是認するわたしたちの感情の根底には、この仮定条件付共感の意識があります。つまり、わたしたちは、「自分の感情は通例であればどんな対象と共振共鳴するか」を示す一般的準則をこれまでの自分の経験から引き出し、ほかの多くの場面と同様、この一般的準則に基づいて目下の自分の不適切な情動を矯正するのです。

5　どんな行為も、胸裏の感情・心の動きから生じ、また、行為が全体として有徳であるか邪悪であるかを判定する最終根拠は、この感情・心の動きにちがいありません。さて、そんな感情・心の動きは、二つの異なる側面に照らして、あるいは二つの異なるものに関係づけることによって、考察されます。第一に、感情・心の動きを掻き立てる原因、つまり、それを湧かせる動機と関係づけることによって、第二に、感情・心の動きが標榜する目的、つまり、それが生み出そうと指向する結果と関係づけることによって、考察されます。

五五

6　心の動きは、それを掻き立てる原因・対象との関係で、似つかわしい／似つかわしくない、釣り合いが取れている／不釣り合いであるという感じを帯びるように思われますが、これこそ、その心の動きに後続する行動の、適切さ／不適切さ、節度／はしたなさが成り立つ要件です。

7　心の動きが目指し、生み出そうと指向する結果の性質が、有益である／有害であるということ、これこそ、行為の功労／罪責、いいかえると、ねぎらわれる権利を行為に与える資質／処罰されるべき理由を行為に与える資質が成り立つ要件です。

8　近年、哲学者たちがおもに考察してきたのは、心の動きの傾向であって、心の動きがそれを掻き立てる原因とどんな関係にあるのかという点には、ほとんど注意を払ってきませんでした。しかし、日常生活でわたしたちは、人のふるまいとそれを指揮した感情を判定するとき、絶えず上の両側面に照らして考察します。わたしたちが他人のなかに愛・悲痛・憤りが過剰であることを認めて非難するとき、わたしたちの考察は、その感情が生み出そうと指向する結果が破滅的であることに加え、その感情の原因が取るに足りないことにも及びます。わたしたちは、まこと激しい情念を正当化する原因に言及して、「彼がひいきにする人の功労はさほど芳しくないね」とか、「彼を見舞った非運はさほどおぞましくないね」とか、「彼が受けた腹立たしい扱いはさほど常識はずれじゃないね」と言ったりします。また、彼の激しい情動にその原因とどこか釣り合うところがあったら、「彼の激情にわたしたちも浸っただろうにね」と言っておそらくそれを是認していたことでしょう。

9　わたしたちはこんなふうにして、心の動きがそれを掻き立てる原因と釣り合う／釣り合わないと判定しますが、そのとき使う準則ないし規則は、わたしたちの側にある・それに対応する心の動き以外ではほとんどありません。わたしたちは、わが胸の内に状況を親しく思い描き、その状況に起因する感情が、わが胸の感情と波長が合い・かみ合う事実を認定する場合、「その感情は対象と釣り合っていてふさわしい」と必ず是認し、その事実を認定しない場合、「その感情は野放図で対象と釣り合わない」と必ず否認します。

10　人は自分にそなわる各種の能力を尺度として、他人にそなわる類似の能力を判定します。わたしがあなたの視覚を判定するときには私の視覚に照らし、あなたの聴覚を判定するときにはわたしの聴覚に照らし、あなたの理性を判定するときにはわたしの理性に照らし、あなたの憤りを判定するときにはわたしの憤りに照らし、あなたの愛を判定するときにはわたしの愛に照らして、判定します。わたしはこれ以外のやり方で、あなたにそなわる類似の能力について判定しませんし、そうすることもできません。

第四章　承前

1　わたしたちは、わが胸の感情と他人の感情が共振共鳴するか食い違うかによって、他人の感情が適切であるか不適切であるかを判定しますが、その審判は、ふたつの異なる場合においてなされます。第一に、感情を掻き立てる対象が、わたしたち自身とも、わたしたちが判定する感情の持ち主とも、なんら特別に関係づけられることなく考察される場合です。第二に、感情を掻き立てる対象が、わたしたちのうち一方か他方の心を特別に揺さぶるものとして考察される場合です。

2　Ⅰ　わたしたちは、自分自身とも、自分が判定する感情の持ち主とも、特別に関係づけられることなく考察される対象については、その人の感情とわが胸の感情が全面的に共振共鳴するときはいつでも、彼に審美眼と洞察力といった資質が帰属するとみなします。

平原の美しさ、山の威風、建築物の装飾、絵画の描きぶり、論文の構成、第三者のふるまい、様々な量と数がおりなす均衡、宇宙の偉大な仕掛けの隠れた歯車とばねから生み出され・果てしなく繰り広げられる森羅万象、要するに、科学と芸術の分野の一般的な主題はすべて、わたしたちと仲間が、互いのだれとも特別な関係がないとみなすものです。わたしたちは、ともに同じ視点に立ってそんな対象に目を向け、ですから、その対象に関してきわめて完全に調和した感情・心の動きを生み出そうとして共感しなくてよい、つまり、共感感情が湧いてくる・想像上の境遇の取り替えをしなくてもよいのです。

それにもかかわらず、わたしたちが対象から違ったふうに心を動かされることがよくあるとすれば、それは、わたしたちの生活

五七

習慣が違うせいで、上の複雑な対象の各部門に自在に注がれる注意の程度に違いがあるか、あるいは、そんな対象が訴えかける心の能力に、生まれつき明敏さの違いがあるからです。

3　この種の事柄について、仲間の感情とわたしたちの胸の感情の波長が合う場合でも、事柄が一見して単純明快で、おそらくそれをめぐって意見を異にする人が一人も見当たらなければ、むろんわたしたちは仲間の感情を是認するにちがいなくとも、にもかかわらず彼が賛辞や賞賛に値するとは思われません。

しかし、仲間の感情がわたしたちの胸の感情と波長が合うだけでなく、わたしたちの感情を先導・指揮するとき、また、彼がその感情を形成する際にわたしたちが見落としていた多くの事柄に注意を傾け、その対象にまつわる様々な事情のすべてに感情を溶け込ませたと映るとき、わたしたちは彼の感情を是認するだけでなく、それが非凡で予想を超えた明敏さと奥深さをもつことに驚嘆・驚愕し、ですから、彼はとても大きな賞賛と喝采に値すると映ります。

思えば、驚嘆・驚愕によって高揚した是認感情は、「賞賛」と適切に呼ばれる感情の内容であり、そんな是認感情の自然な表現が喝采です。[6] えもいわれぬ美しさは汚らしくてたまらない醜さよりも好ましいとか、2かける2は4であると判断する人の解答は、きっと全世界から是認されるにちがいありませんが、むろん大して賞賛されることはありますまい。

審美眼をもつ人は、明敏できめこまやかな鑑定能力を備えるからこそ、微細でほとんど感知できない美醜の差異を見分けます。経験豊富な数学者は、隅々まで行き届く精密さを備えるからこそ、どんなに込み入り頭を悩ませる比率も楽々と解き明かします。科学と芸術のすぐれた指導者で、わたしたちの胸の感情を指揮・道案内する人は、その才覚が奥深く卓越した精度を備えるからこそ、わたしたちを驚嘆・驚愕させて目をみはらせ、賞賛を掻き立て、喝采に値すると思われるのです。いわゆる知的な美徳に献じられる大半の賛辞は、以上の根拠に基づいています。

4　こうした資質がわたしたちに勧告される第一の理由は、その資質が役立つからだと考えられるかもしれません。たしかに、この理由づけは、わたしたちがそこに注意を傾けるようになると、その資質に新しい価値を付加します。[7] しかし、元を正せば、わた

したちが他人の判断を是認するのは、それが役立つからではなく、正しいから、正確だから、真実と現実にかなっているからです。つまり、わたしたちが他人の判断にそんな資質が帰属するとみなす理由は、いうまでもなく、他人の判断がわたしたち自身の判断と合致するという事実を認定するからにほかなりません。審美眼も同様であって、それが是認されるのは、元を正せば、役立つからではなく、正当で、きめ細やかで、対象の細部にまで行き届くからです。「この種の資質はすべて役立つ」という考えは、明らかに後知恵であって、そんな資質が是認されるべくわたしたちに勧告される第一の理由ではありません。

5　Ⅱ　わたしたち自身の心、または、わたしたちが判定する感情の持ち主の心を特別なしかたで動かす対象については、この調和・共振共鳴を保持することは、科学と芸術の場合よりも、難しく、また同時に、はるかに重要です。

わたしが非運に見舞われたり、権利侵害を加えられたりする場合、仲間がそれを見る視点と、わたしがそれについて考える視点とが同じであるということは、自然に任せていては起こりません。わたしの非運や権利侵害は、はるかにわたしの身近にあって心を揺さぶります。わたしたちは、絵画、詩歌、学問体系をながめる場合とは異なり、同じ立ち位置からその非運や権利侵害をながめることはなく、ですから、それによってともすればずいぶん違ったふうに心を動かされがちです。

一方、非運に見舞われたり権利侵害を加えられたりするときのように、わたしの関心を大いに引く場合に比べると、わたしも仲間も関心をもたないようなこだわりのない対象については、そんな感情の共振共鳴がなくてもそれを見過ごすことはずっと簡単にできます。あなたはわたしが賞賛する絵画、詩歌、あるいは学問体系でさえ歯牙にかけないかもしれませんが、だからといってわたしたちが口論する危険はほとんどありません。常識的にはわたしにしてもあなたにしても、絵画や詩歌や学問をめぐって大いに利害得失があるわけではありません。それらはすべて、わたしたちのいずれにも甚だこだわりのない問題にちがいありませんから、たとえ意見が正反対であろうと、わたしたちの親愛の情は相変わらずほとんどまったく同じです。

（6）I. ii. 1. 12. 参照。また、人間の知識における驚嘆・驚愕の一般的な役割については、'History of Astronomy', I-II（in *EPS*）を見よ。

（7）スミスは IV. ii. 3-7 でヒュームを論じているのでそれを参照。

しかし、あなたかわたしが特別に心を動かされる対象については、話はかなり違います。理論的思索の題材についてあなたが下す判断や、芸術の題材についてあなたがいだく感情は、たとえわたしとまったく正反対でも、わたしはこの対立を楽々と見過ごすことができ、少しでも機嫌が良ければ、まさしくそれを話題にしてあなたが語っても、どこか面白がる余裕があるでしょう。しかし、あなたは、わたしが遭った非運を案じて同類感情をもたないとか、その感情の強さがわたしを動転させた悲痛とまったく釣り合わない場合、あるいは、あなたは、わたしが受けた権利侵害に対して怒りをもたないとか、その怒りの強さがわたしに我を忘れさせた憤りとまったく釣り合わない場合、わたしたちは、金輪際こうした非運や権利侵害について語り合えません。わたしたちは、お互いに不寛容になります。わたしはあなたと同席することに耐えられないし、あなたもわたしと同席することに耐えられません。あなたはわたしの剣幕・激情に接しておろおろし、わたしはあなたの冷淡な無神経・冷血に接して激高します。

6　以上のあらゆる場合において、観察者と主たる当事者の間に感情の共振共鳴がともかく成り立つには、観察者は、まず何よりも、わが身を相手の境遇に置き、辛酸に苦しむ相手の身におよそ起こりうるどんな些細な事情もつぶさにわが身に親しく思い描こうと全力を尽くさねばなりません。観察者は、仲間の状況をまるごと、そのどんなに細かいふとした事でさえも残らずくみ上げ、共感の根底にある想像上の境遇の取り替えをできるだけ完全に仕上げようと懸命にならなければなりません。

7　しかしこうした努力のあげくに、観察者の情動は相変わらず、ともすれば苦境にあえぐ人が感じる激情に届かないきらいが強いでしょう。世人は生まれながらに共感能力をそなえていても、他人にふりかかった事を案じて心にいだく感情は、主たる当事者を自然に高ぶらせる情念ほど強くはありません。共感の根底にある想像上の境遇の取り替えは、つかの間のことにすぎません。自分の身は安泰であるという思い、自分自身は実際のところ苦境にあえいではいないという思いが、世人の脳裏に絶えずしゃしゃり出てきます。世人はそう思うからといって、苦境にあえぐ人の感情とどこか相似た情念をいだかないわけではありませんが、それに匹敵する同じ程度の激情までもいだくことはできません。

主たる当事者はこの点を承知していながらも、同時に、もっと完全な共感を狂おしく欲しがります。彼が切望する救済は、観察

者の心の動きと彼の胸のそれが全面的に協和するときにだけ、もたらされるものです。観察者の胸の情動が、彼の胸の激しく心地悪い情動と少しも狂わず拍子を合わせるのを見ることが、彼の唯一のなぐさめです。

しかし、彼がこのなぐさめを得たければ、自分の情念を低く抑えて、観察者がそれに歩調を合わせられるようにしないかぎり、見込みはありません。妙な言い方ですが、彼は自分の情念がもつ自然のままの尖った声調を抑えて丸くし、周りにいる人たちの情動と調和・協和するかたちにまで削らなければなりません。たしかに、周りの人の心情は、彼の心情とはつねにどこか違うでしょうし、いたわりが、当人にやどる悲しみときっかり同じであるはずはありません。なぜなら、「境遇の取り替えは、共感感情が湧いてくる源ではあるが、想像上のことにすぎない」という意識が内心あるために、共感感情は、その程度が弱まるばかりか、その種類も多少は変質し、相当かけ離れた修正を加えられるからです。

しかし、いうまでもありませんが、上の二つの感情は、社会が調和するのに十分な程度には相互に共振共鳴することができます。それらはけっして同音で斉唱することはないでしょうが、協和音を奏でることはできますし、また、これこそが、［社会が調和するのに］必要とされ・要求されるすべてです。

8　自然は、この協和を生み出すため、世の観察者に「主たる当事者をとりまく事情を仮に自分のものとして引き受けなさい」と教え、しからば、主たる当事者には「観察者の事情を仮に自分のものとして多少は引き受けなさい」と教えます。

観察者は、絶えず主たる当事者の境遇にわが身を置こうとし、つぎに、当事者の胸の内と似た情動をいだこうとします。しからば、主たる当事者も、同じように絶えず観察者の境遇にわが身を置こうとし、つぎに、彼の運勢をながめる観察者の心が冷淡なことは彼にもわかっていますから、その冷淡さを多少は心にいだいてわが運勢に接しようとします。

観察者は、「もし自分が実際に苦境にあえぐならば、わが胸の内はどんなだろうか」と絶えず思いをはせようとし、しからば、主たる当事者も、同じように絶えず、「もし自分がわが身の境遇をみる世の観察者の一人にすぎなければ、どんなふうに心を動かされるだろうか」と想像する気持ちになります。

観察者は共感することによって、いささかなりとも当事者の目でその境遇を見るように仕向けられ、しからば、当事者は共感す

六一

ることによって、とりわけ、観察者の面前で見守られながら行動するときには、いささかなりとも観察者の目でその境遇を見るように仕向けられます。要するに、当事者は、世の観察者の面前に出ていき、彼らがわが境遇によってどんなふうに心を動かされるだろうかと思いを凝らし、この率直で公平な視点から自らの境遇をながめはじめますが、当事者がこんなふうに反省した後にいだく情念は、当初の情念よりもずっと弱いので、反省する前の激しい情念をきっと中和します。

9　したがって、友人がそばにいるのに心がまったく穏やかさ・静けさを回復しないほどかき乱されることはめったにありません。わたしたちは、友人の面前に出て行ったとたん、多少は胸が穏やかになり、落ち着きます。わたしたちは、友人がこちらの境遇をながめる視点を即座に思い出し、自分でもそれと同じ視点からわが境遇をながめはじめます。思えば、共感は間髪いれず効果を発揮するものです。

ただの知り合いから期待する共感は、友人から期待するそれよりも弱く、そんな知り合いには、友人に打ち明けられるような細かな事情を包み隠さず言うことはできませんから、わたしたちは、ただの知り合いの前ではことさらに心穏やかさを装い、相手が気後れしない一般的な身の上話だけに集注しようと努めます。見も知らない人の集まりから期待する共感は、さらにもっと弱く、したがって、わたしたちは、彼らの前では一段と心穏やかさを装い、相並んで同席する人々に期待される共感感情の強さにまで情念を低く抑えるよう常に努力します。

これは単に外見を取り繕っているのではありません。思えば、わたしたちがいやしくも自分自身の主人であるかぎり、単なる知り合いが面前にいれば、心の底から落ち着き、それは、友人が面前にいるときよりも一段とそうであり、また、見も知らない人々の一団が面前にいれば、単なる知り合いが面前にいるときよりも一段と落ち着きます。

10　以上のとおり、いつ心が不運にして穏やかさを失おうとも、むつみあい・語らうことは、心穏やかさを回復する最強の治療法であり、また、むらのない円満な気性――それは、足ることを知り自ら楽しむ心境にまこと不可欠なもの――を保存する最良の防腐剤です。隠棲して思索にふける人たちは、ややもすると家にこもってじっと悲痛や憤りをかかえ思いつめるきらいがあります。

彼らは、わりあい情け深く・高潔無私で、名誉に対して人一倍敏感な人が多いのですが、世間の人々の間ではごくありふれた・むらのない気性をめったにもちません。

第五章　いつくしまれる美徳と仰ぎ見られる美徳について

1　以上のように、観察者は、主たる当事者の感情に入り込もうと努力し、一方、主たる当事者は、観察者が歩調を合わせられる程度にまで自分の情動を低く抑えようと努力しますが、これらふたつの異なる努力こそ、二種類の異なる美徳の根底にあるものです。なごやかな美徳、心やさしい美徳、いつくしまれる美徳、率直な謙虚さや寛大な情け深さといった美徳、そんな美徳の根底には、観察者の努力があります。偉大な美徳、威光を放ち・仰ぎ見られる美徳、自己否定の美徳、自己支配の美徳、すなわち、諸情念を統制し、わたしたちの自然本性のあらゆる動きを足下におき、これをわが胸の威厳・名誉の要求と、わが身のふるまいの適切さの要求に従わせる美徳は、主たる当事者の努力から生まれてきます。(8)

2　共感しやすい人の胸には、ともに語らう仲間のあらゆる感情が木霊するように思われ、仲間が災厄に見舞われるとそれを案じて悲痛になり、権利侵害を加えられるとそれに憤り、好運に恵まれると快哉を叫ぶのであって、こんな人はどんなにいつくしまれるべき人物として映るでしょう。わたしたちは、そんな彼の仲間の境遇を親しく心に描くとき、仲間の感謝の念に入り込み、まこと愛情こまやかな友人の心優しい共感から彼らが引き出すにちがいない慰めの大きさを感じます。

また、薄情で頑固な人は、わが身ばかりを案じて、他人の幸不幸にはまったく無神経ですが、こんな人はどんなに心地悪い人物として映るでしょう。そこには、先ほどとは反対の理由があります。血が通う人間ならだれしも、こんな人物と語らえば、その面前で苦痛を受けるにちがいなく、わたしたちはその苦痛に入り込んでいきますが、とりわけ、不幸に見舞われた人や権利侵害を加

(8)　III. iii. 35; VII. ii. 1-5 参照。また、Hume, *Treatise of Human Nature*, III. iii. 4; *Inquiry*, App. 4. 6. を参照。

えられた人の苦痛は格別であって、そんな苦痛によせるわたしたちの共感は、ややもするときわめて深くなりがちです。

3　一方、当事者がわが事の渦中にありながらじっと思いを凝らし・自己を制御するならば、それによってあらゆる情念は威厳を帯びたものになり、他人が入り込めるほどに低く抑えられるのであって、わたしたちは、こんな力を発揮する当事者のふるまいにどんなに気高い適切さと気品を感じるでしょう。繊細さのかけらもなく悲痛を騒々しく訴え、ため息と涙、ずうずうしくすがりつく泣き言によっていたわりをせがむ――こんな人には胸が悪くなります。しかし、悲しみを胸の奥にしまい無言で毅然とし、悲しみが現れているのはわずかに、泣きはらした目、かすかに震える唇と頬、そして、よそよそしくも心に沁み入る冷淡さをやどす一挙一動である――こんな人には、畏敬の念をもちます。こんな悲しみは、わたしたちに対して、同様に黙って静かにしているように迫ります。わたしたちは、この悲しみを尊敬に満ちた気遣いで見守り、不適切な言動であの一糸乱れぬ心穏やかさを邪魔せぬように、集注して自分の一挙一動を監視します。なにしろ、この心穏やかさを崩さず保つにはまこと大きな努力を要しますから。

4　怒気も同様であって、わたしたちがそれを制止したり押しころしたりすることなくその激烈さにひたるとき、怒気はいばった粗野な調子であり、これほどいとわしいものはほかにありません。しかし、怒気は、どんなにひどい権利侵害を訴追するときも、気高く高潔無私の憤りに支配されるならば、賞賛されます。その訴追を進めるのは、権利侵害がともすれば被害者の胸に掻き立てがちな激高ではなく、公平な観察者の胸に自然に奮い立たせる怒りです。この怒りは、衡平を慮る点で被害者の憤りに勝り、それがつとに命じてきた限度を超えてうかつに胸の内を漏らす言動を許しません。観察者の怒りは、仕置きや処罰において、利害に囚われない人ならだれもがその遂行に快哉を叫ぶと思われる限度を守り、それ以上の仕置きを試みようとは考えもしませんし、それ以上の罰を加えてやりたいとも思いません。

5　以上のような次第ですから、他人を案じて感ずるところが大いにあり、わが身を案じて感ずるところがほとんどないこと、つまり、私事にかまける心の動きを押しころし、他人の幸福を望む心の動きにひたること、これこそ、人間の自然本性が完成すると

いう意味であり、また、それさえあれば、感情・情念の調和――感情・情念の気品と適切さはひとえにこれを本質としています――が世人のあいだに生まれてきます。

キリスト教の偉大な法によれば、隣人に注ぐ愛は、わが身に注ぐ愛と等しくなければならず、しからば、自然の偉大な根本教義によれば、わが身に注ぐ愛は、隣人に注ぐ愛を超えてはなりません。あるいは同じことに帰しますが、わが身に注ぐ愛は、隣人がわたしたちに注ぐことのできる愛を超えてはなりません。(9)

6　審美眼と洞察力が賛辞と賞賛に値する資質とみなされるとき、それらは普段めったに見られないほどの感情の繊細さと悟性の明敏さを当然そなえるものと考えられます。しからば、細やかな神経と克己自制が美徳として成立する要件は、それらの資質の程度が並大抵でなく非凡であることだと理解されます。

情け深さがいつくしまれるべき美徳であるには、もちろん、世間の無骨な庶民の域をはるかに超える細やかな神経を備えなくてはなりません。矜持が立派で高貴な美徳であるには、もちろん、いつか衰え死ぬ境涯の無力きわまる人間の域をはるかに超える克己自制を発揮できなくてはなりません。

普通の水準にとどまる知的資質に、才能はありません。しからば、普通の水準にとどまる道徳的資質に、美徳はありません。美徳は、卓抜な力であり、ふだんめったに見られないほど偉大で美しいものであって、庶民的で月並みな水準をはるかに抜いてそびえています。いつくしまれるべき美徳の本質たるこまやかな神経は、絶妙で予想を超えた繊細さと心優しさによって驚くばかりでなければなりません。威光を放ち・仰ぎ見られるべき美徳の本質たる克己自制は、人間の自然本性のどんなに御しがたい情念をもしのぐ超絶した力によって驚くばかりでなければなりません。

7　この点で、美徳と単なる適切さのあいだには相当な違いがあります。賞賛と顕彰に値する資質・行動は、単に是認に値するだ

（9）III. vi. 1. 参照。

けの資質・行動とはかなり違います。多くの場合、万全の適切さをもって行動するのに必要なのは、せいぜい世間のどんなにとりえのない人でも持ち合わせる普通の標準的な水準の神経のこまやかさや克己自制にとどまり、場合によってはその程度の水準さえ要りません。[10] ずいぶん低俗な例で見ますと、空腹のとき物を食べることは、通常の場合、たしかにまったく正しくかつ適切な行為であり、だれからもそんな行為として是認されるにきまっています。しかし、「その行為は有徳である」という言い方をすれば、これほど見当はずれなことはないでしょう。

8　逆に、行動が万全の適切さには届かなくても、相当高い美徳をみとめられることがよくあります。それは、万全の適切さに到達するのがひどく困難をきわめる場面で、そんな行動が未熟ながらも、大方の予想以上に完成の域に近づくからです。そして、このことは、克己自制を思い切り堂々と発揮しなければならない場面にとてもよく当てはまります。

たしかに、人間の自然本性にまこと過酷な境遇がのしかかることはあります。そんな境遇では、どんなに強い自己統御も、所詮は人間のようにまこと不完全な被造者にそなわる水準を出ませんから、人間の気弱さがあげる声をすっかり封じ込めることはできませんし、情念の激しさを削ぎ落として公平な観察者がすっかり入り込んでゆける穏やかな調子にすることはできません。

したがって、そんな場合に苦境にあえぐ人の態度が万全の適切さに届かなくても、それは、未熟ながら何らかの喝采に値し、しかるべき意味では有徳であると呼ばれてもおかしくありません。それは、未熟ながら大多数の人間になし得ない高潔無私と矜恃の努力を明証しており、絶対的完全性に到達しなくても、そんな試練の場面でふだん目撃されたり期待されたりする水準をはるかに超えて完成の域に近いといってかまいません。

9　この種の事例で行動に与えられるのがふさわしいと思われる非難や喝采の程度を決定しようとするとき、わたしたちはふたつの異なる基準をとってもよく使います。

第一の基準は、欠けるところのない適切さ・完成を表す観念ですが、人間のふるまいが上の困難な境遇でそれを成し遂げたことは一度もなく、そこに到達できる見込みもまったくありません。この基準に照らせば、すべての人間の行動はいつまでも非難に値

し未熟であるにちがいありません。

第二の基準は、この欠けるところのない完成を目指す途上において、大多数の人たちの行動が通常近づける程度の地点、つまり、あの無欠の完成までの距離を表す観念です。この水準を超えるどんな行動も、いかに絶対的完全性からかけ離れていようと、喝采に値すると思われますし、この水準に届かないどんな行動も、非難に値すると思われます。

10　想像力に訴えかけるあらゆる学芸の作品を判断するとき用いられる基準も上と同じです。評論家が詩歌や絵画の大家の作品を吟味するとき、彼自身の心の中にある完全性の観念に照らして吟味することがあります。それは、当該作品やその他の作品も含め、およそ人間の仕事が到達する見込みのない完全性を示しており、作品をこの基準と照合するかぎり、そこに見ることができるのは欠陥と未熟な点ばかりです。

しかし、その作品が同じくくりの作品群において占めるべき地位を考察する段になると、きっと評論家は作品をずいぶん違った基準と照合します。それは、目下の特定の学芸分野で達成されるのがめずらしくない普通程度の卓抜さです。この新しい尺度によって作品を判断するとき、それはしばしば最高の喝采に値すると映ります。なぜなら、その作品は、競争相手となりうるほかの作品の大部分よりも、ずっと完全性の観念に接近しているからです。

セクションⅡ　適切であるといってよい水準は、情念の違いに応じてそれぞれ定まるということ

序　論

1　およそ情念がわたしたち自身と特別な関係にある対象によって掻き立てられる場合、それが適切である度合い、つまり、観察者が歩調を合わせられる感情の強さは、いうまでもなく、しかるべき平均値として成り立つにちがいありません。その情念が強す

（10）VII. ii. 1. 参照。

ぎたり、弱すぎたりすると、観察者はそこに入り込めません。たとえば、私生活上の非運や権利侵害に対する悲痛と憤りは、たやすく強くなりすぎ、大方の世人にあって実際そうです。同様に、それらが弱すぎる場合も、比較的まれにですが起こります。わたしたちは、悲痛の過剰を「気弱」、憤りの過剰を「逆上」と名付け、また、それぞれの不足を「間抜け」・「無神経」、「いくじなし」と名付けます。わたしたちはそのいずれにも入り込んでゆけず、ただそれらを見て仰天し、あきれます。

2　しかし、適切さを示す値の本質であるこの平均値は、情念が違えば異なります。ある種の情念にあってその値は高く、別の種類の情念にあっては低いのです。

ある種の情念は、文句なしにきわめて強く感じずにはいられない場面でも、それをとても強く表す所作は、はしたないものです。また、別の種類の情念は、おそらくその情念自体はさほど抗しがたく湧き上がることはなくとも、それを思い切り強く表す所作は、多くの場合にきわめて上品です。

第一の種類の情念は、しかるべき理由から、共感がほとんどあるいはまったくよせられず、第二の種類の情念は、別の理由から、最大限の共感がよせられます。要するに、人間の自然本性の多様な情念をつぶさに考察すれば、「情念に対して世人が思わずよせる共感が強ければ、ちょうどそれに比例して、その情念は節度があるとみなされ、その共感が弱ければ、ちょうどそれに比例して、はしたないとみなされる」という事実が認められるでしょう。

第一章　肉体から湧き出る情念について

1　I　肉体がしかるべき境遇に置かれたり、しかるべき欲動に従ったりすることから情念が湧き上がる場合、それを少しでも強く表に出すのは、はしたないことです。なぜなら、同席する人たちは同じ肉体の欲動に従っておらず、彼らがそこから生ずる情念に共感することは期待できないからです。たとえば、激しい空腹感は、多くの場面で自然であるばかりか、避けることもできませんが、いつだってはしたないものですし、がつがつ食べるのは、万人が認める無作法の一条目です。

しかし、空腹感にさえも、ある程度の共感はよせられます。仲間がおいしそうに食事するのを見るのは心地よく、まずそうな所作はすべて神経を逆なでします。まこと耳障りな言い方かもしれませんが、健康な人に習慣的にはたらく食欲は、胃袋をおいしそうな所作とたやすく唱和させ、まずそうな所作とは唱和させません。

わたしたちは、飢餓のもたらす辛酸が兵糧攻めや航海の日誌に書かれているのを読むと、それに共感できます。わたしたちは、苦境にあえぐ人たちの境遇にいるわが身を想像し、するとたちまち、きっと彼らを動転させるにちがいない悲痛・恐怖・放心を心にいだきます。わたしたちは自分でもそんな情念をいささかなりとも感じ、だからこそ彼らに共感するのですが、しかし、日誌を読むことによって空腹になるわけではなく、この場合でさえ、「彼らの空腹感に共感する」という言い方は不適切です。

2　自然が両性を結びつける情念についても同じことが言えます。それがすべての情念のなかでもっとも激しく燃え上がるのは自然ですけれども、それを強く表に出す所作はすべて、どんな場面でもはしたなく、たとえ、人間と神のあらゆる法が「どんなにそれに深く浸りきってもまったく落ち度はない」と承認する間柄でも、はしたないものです。しかし、この情念にさえ、ある程度の共感はよせられると思われます。わたしたちが同性に話しかけるように女性に話しかけることは不適切です。つまり、女性が同席すると、わたしたちは、一層はしゃいだり、おどけたり、気遣ったりして、心が弾むと予想されますから、女性にまったく無神経な態度をとれば、その男性は同性の眼から見ても、多少は軽蔑される対象になります。

3　以上のとおり、わたしたちは肉体から湧き出るあらゆる欲望に嫌悪感をいだくのであって、そんな欲望を強く表に出す所作はすべて嫌気を催し・心地悪いものです。古代の哲学者のなかには、こんな情念はわたしたちが野獣と共有するもので、人間の自然本性の特徴をよく表す資質とは関係がなく、それゆえ人間の自然本性の威厳にふさわしくないと説く人たちがいました。しかし、わたしたちが野獣と共有する情念は、憤り、親子の情などほかにもたくさんあり、感謝の念ですらその例ですが、野獣と共有するからといってさほど粗野な情念とは映りません。

肉体の欲望が他人に表れるのを目にするとき、わたしたちがそれに対して格別な嫌気を催す本当の理由は、その欲望に入り込ん

六九

でゆけないからです。そんな欲望を感じる当人からみても、欲望が満たされるとたちまち、それを掻き立てた対象は心地よくなくなります。その対象が目の前にあるだけで、神経を逆なでされるということはよくあり、当人は、つい先ほどまで我を忘れさせた魅力を見つけようとむなしく探し回りますが、今となっては他人と同様、わが胸の情念にほとんど入り込んでゆけません。食事を終えると、わたしたちは食器類を下げさせますが、身を焦がす・狂おしくてたまらない欲望の対象についても、それがまさしく肉体から湧き出る情念の対象にほかならなければ、下膳同様の扱いをします。

4　こんな肉体の欲望を制御する力こそ、「節制」と適切に呼ばれる美徳の本質です。こんな欲望を押しころし、健康と財貨への配慮から命じられる規則の限度にとどめることは、予見注意力の役目です。他方、こんな欲望を封じ込め、気品・適切さ・繊細さ・慎みから命じられる要求の限度にとどめることは、節制の職責です。

5　Ⅱ　同じ理由で、肉体の痛みから大声を上げることは、それがどんなに我慢できない痛みでも、いつだって男らしくない・かっこうが悪いと映ります。しかし、肉体の痛みにさえもかなり強い共感がよせられます。すでに考察したとおり、[11] 一撃が他人の脚や腕をめがけ、その部位に当たる寸前であるのを目にすれば、わたしは自然に縮こまって、自分自身の脚や腕を引っ込めます。そして、実際に一撃が加えられたとき、わたしはそれをいささかなりとも感じ、被害者と同様にその一撃を痛いと思います。しかし、わたしの痛みはむろん格段に軽く、だからこそ、被害者が絶叫すれば、わたしは被害者に歩調を合わせられず、そのためきっと被害者を見下します。以上のことは、肉体から湧き出るすべての情念に当てはまります。要するに、そんな情念はまったく共感感情を掻き立てないか、掻き立てるとしてもその程度は、被害者の味わう強烈な感じとはまるで釣り合いません。

6　想像から湧き出る情念についてはまったく話はちがいます。わたしの身体の姿かたちは、仲間の身体に加えられる変化によってほんのわずかな影響を受けるにすぎません。他方、わたしの想像は、もっと伸縮自在であり、知人の想像の形態・構成を、妙な言い方ですが、もっと素早く身にまといます。そういうわけで、恋愛や野望の挫折は、身体に加えられるどんなひどい害悪にもま

して強い共感感情を奮い立たせます。こんな情念は、ひとえに想像から湧き上がります。

全財産を失った人は、健康に被害がなければ、肉体には何も感じません。そんな彼が味わう苦しみは、想像だけから生じます。このとき、想像力は彼の心に、威厳の喪失・友人からの無視・敵対者からの軽蔑・生計の依存・欠乏・惨めさといった、その身に足早に迫っている状況を描写し、だからこそわたしたちは彼に共感するのですが、その共感が一段と強い理由は、わたしたちの身体が彼の身体に倣って自らを成型するよりも、わたしたちの想像が彼の想像に倣ってそうするほうが素早くできるからです。

7　一般に脚を失うことは失恋よりも真の災厄とみなされます。しかしながら、肉体の一部喪失を軸に破局が展開する筋立ての悲劇は駄作でしょう。他方、失恋という非運は、たとえどんなに軽薄に映るにせよ、数々の名作悲劇を生み出してきました。

8　痛みほどすぐに忘却されるものはありません。痛みがなくなるとたちまち、痛みからくるもだえ苦しみはすっかり消え、痛みについて考えても、もはやどんな煩悶もわたしたちに訪れません。痛みが止むと、わたしたちは、かつて心にいだいていた焦燥・懊悩のなかに自分でも入り込んでゆけません。

他方、友人が不用意に発する一言は、もっと長続きする不安を引き起こします。この一言が生み出すもだえ苦しみは、その言葉とともに過ぎ去ることは決してありません。なによりわたしたちを悩ませる原因は、五官に訴える対象でなく、想像力に訴える観念です。ですから、不安を引き起こすのが観念である以上、時間その他の巧まざる事態によってある程度その観念が記憶から消えてしまうまで、想像力はそれを思い出しては、心の中でくよくよしたり、いらいらしたりしつづけます。

9　痛みは、危険を伴っていなければ、大して生々しい共感感情を奮い立たせません。わたしたちは苦境にあえぐ人の身もだえに共感しなくても、その恐怖心には共感します。しかし、恐怖心は、ひとえに想像から引き出される情念であって、このとき想像力

（11）I.i.1.3.

七一

が描写するのは、わたしたちが実際に感じる苦しみでなく、将来ひょっとすると受けるかもしれない苦しみであり、その像は不確実・不安定なために、わたしたちをますます一喜一憂させます。痛風や虫歯は、痛くて七転八倒するにもかかわらず、ほんのわずかな共感感情しか掻き立てませんが、もっと危険な疾病は、ほんのわずかの痛みしか伴わなくても、きわめて強い共感感情を掻き立てます。

10　外科手術を見て失神したり気分が悪くなったりする人がいますが、肉体を切り裂くことから生ずる身体の痛みは、そんな人たちにきわめて過剰な共感感情を掻き立てるように思われます。わたしたちは、痛みが体内の不調から湧き上がる場合よりも、体外の原因から生じる場合に、はるかに生々しくまざまざとそれを心にいだきます。隣人が痛風や結石の痛みにさいなまれているとき、わたしはその人の激痛をほとんど思い描くことができません。他方、隣人が肉を切られたり、えぐられたり、骨を折られたりして味わうにちがいない苦しみについては、わたしはきわめて明晰な像をいだきます。

しかし、なぜこんな対象があんなにも激しい効果をわたしたちに生み出すかといえば、その主たる原因は、対象の目新しさです。十数例の死体解剖、そして同じくらいの数の切断手術に立ち会ってきた人ならば、その後はどんなにこの種の外科手術を目にしても、一向に無関心であり、まったく無神経ということもよくあります。一方、わたしたちは、たとえ五百以上の悲劇を読んだり、その上演を見たりしても、心に映し出される劇中の対象に対して自分の神経がさほど鈍麻したと感じることはほとんどありますまい。

11　ギリシャ悲劇には肉体の苦痛を描写することによって、いたわりを掻き立てようとする意欲作があります。ピロクテテスは艱難辛苦の果てに絶叫し失神します。ヒッポリュトゥスとヘラクレスはいずれも、きわめて過酷な拷問を受けて息絶えるという筋書きで登場しますが、その拷問は、ヘラクレスの勇猛をもってしても持ちこたえられないものであったように思われます。(12)

しかし、こんなすべての例でわたしたちの関心を引くのは苦痛でなく、それ以外の事情です。ピロクテテスの傷だらけの脚ではなく、彼の孤独のゆえに、わたしたちは心を揺さぶられ、この魅力あふれる悲劇はロマンティックな荒涼とした雰囲気をただよわ

せ、それが想像力にはまこと心地よいわけです。ヘラクレスとヒッポリュトゥスのもだえ苦しみがわたしたちを引き込むのは、ひとえに、その結末が死であることをわたしたちが予想するからです。これらの英雄が健康を回復するという筋立てならば、彼らが苦しむ様子を描写することはまったくの無粋だと思われるでしょう。作中の辛酸が結石の痛みを抜きにして語れないような代物をはたして悲劇と呼べるでしょうか。もとより、結石の痛みの右に出るものがないのは事実です。上のように肉体の苦痛を描写することでいたわりを掻き立てようとする意欲作は、ギリシャの舞台演劇が垂範してきた典雅な作風を台無しにする一例とみなされてよいでしょう。(13)

12　わたしたちが肉体の痛みによせる共感はわずかでしかないということ、これこそ、平常心を保ち・がまん強く肉体の痛みに耐えることが適切である根拠です。どんなに過酷な拷問を受けても、うかつに弱音を吐かず、うめき声を漏らさず、わたしたちが完全には入り込んでゆかない情念に屈しない人は、最高の賞賛を勝ち取ります。彼は不撓不屈であればこそ、わたしたちのよそよそしく無神経な態度に拍子を合わせることができます。わたしたちは、彼がこの目的のために矜持をもってする努力に賞賛を贈り、それにすっかり歩調を合わせます。わたしたちは、彼の態度を是認し、その上、人間の自然本性が普通は弱いものであることを経験から知っていますから、びっくりして、どうして彼は是認に値すべく行動できるのだろうかと驚嘆するわけです。すでに述べたとおり、是認感情は、驚嘆・驚愕と混ざり合って高ぶると、賞賛と呼ばれるのが適切な感情を形成し、それの自然な表現が喝采です。(14)

(12)　スミスが言及しているのは、ソフォクレスの *Philoctetes*、エウリピデスの *Hippolytus*、ソフォクレスの *Trachiniae* にそれぞれ出てくる挿話である。
(13)　スミスは *Rhetoric* 21 で演劇について論じているのでそれを参照。
(14)　I.i.4.3.

第二章　想像力に付着した特定の嗜好ないし習慣から湧き出る情念について

1　想像力に付着した特定の嗜好や習慣から湧き出る情念は、まったく自然であると承認されるにしても、想像から引き出される情念でありながら、ほんのわずかしか共感されません。世人の想像力は、同じ特定の嗜好を付着させていませんから、そこに入り込んでゆけないのです。そんな情念は、ある種の生活面ではほとんど不可避なものとして許されるにしても、いつだって多少は無粋です。

このことは、ずっと相思相愛の間柄である両性に、自然にはぐくまれる強い愛着に当てはまります。わたしたちの想像力は、恋する人と同じ水路を帆走してきませんでしたから、彼のひたむきな情動にわたしたちは入り込んでゆけません。友人が権利侵害を受けたのなら、わたしたちは彼の憤りにすぐさま共感し、彼が腹を立てている当の相手に対して立腹します。友人が何か恩恵を受けたのなら、わたしたちはすぐさま彼の感謝の念に入り込み、彼の恩人に功労を認めたいと、とても強く感じます。しかし、彼が恋愛をしている場合、わたしたちは彼の情念がおよそ恋愛としてまっとうであると思うにしても、自分も彼と同じ種類の感情を、彼が恋愛感情をいだく相手に対してもたねばならないとは思いません。

恋愛感情を味わう当人以外の皆にとって、この情念はその対象の価値とはまるで釣り合っていないと映ります。恋愛が自然であることをわたしたちは知っているので、しかるべき年齢に恋愛は許されるのですが、その感情にわたしたちは入り込んでゆけませんから、恋愛はいつだって笑いの種です。恋愛感情をどれほど真剣に力強く表現しても、第三者の目には無粋と映ります。恋する男は、お相手の女性と気の合う仲良しであっても、その関係は、その女性以外のだれとも結ばれていません。彼はこのことを自分でも承知しており、五官を冷静に保つかぎり、わが胸の情念をひやかしと冷笑であしらおうと努めます。そんな態度をとらなければ、わたしたちから耳を傾けてもらえません。なぜなら、わたしたちは、自分でもこんな態度でなければ、わが恋路を語る気にはならないからです。カウリー、ペトラルカは、その激しい愛着を誇張するのをけっしてやめず、重厚に、衒学的に、冗長に恋愛を語りましたが、これにはげんなりします。他方、オウィディウスの陽気な語り、ホラティウスの淑女への礼をわきまえた語りは、つねに心地よいものです。(15)

2　しかしです。わたしたちはこの種の愛着に適切な共感をよせることはありませんし、その特定のお相手に情を移すまでになろうとは想像すらしません。けれども、同種の情念をわたしたちはかつていだいたことがあったり、ついそれを心にいだかずにいられなかったりするので、恋心が成就して幸福に大きな期待がかけられると、すぐさまそこに入り込んでゆき、同様に、失恋して何ともいえない辛酸の恐怖が予感されると、すぐさまそこに入り込んでゆきます。

恋愛がわたしたちの関心を引くのは、情念としてでなく、境遇としてであって、それが、他の情念――あらゆる種類の希望、恐怖、辛酸――を引き起こし、わたしたちはそこに引きつけられます。その点で、航海誌の記述を読む場合も同様であって、わたしたちの関心を引くのは空腹感でなく、空腹感が引き起こす辛酸です。わたしたちは、適切な意味では、恋する人の愛着に入り込みませんが、彼がそこから引き出すロマンティックな幸福にかける期待には、即座に歩調を合わせます。

しかるべき境遇でだらしなく解放感にひたり激しい欲望で精根尽き果てたあと、静謐・静穏を待ち遠しく思ったり、気晴らしになる情念に満たされてそんな静けさを見つけたいと望んだり、ティブルスの華麗で心優しく情熱的な筆がまこと嬉々として叙述した・心穏やかに人里離れて暮らす田園生活をひとり思い描いたりするのは、どんなに自然な心理であることかと感じられます。それは、幸運の島で送られていると詩人たちが叙述する生活に似て、友情・自由・休息があり、[16]また、労働や気苦労をしなくてよく、また、それにつきまとう一切のわずらわしい情念とは無縁な暮らしです。舞台上のこんな場面でさえ、実際に享受される生活としてでなく、むしろ待望される生活として脚色されるとき、わたしたちをこよなくひきつけます。恋愛感情と混じり合い、その根底におそらく在る汚らわしい情念は、恋愛の成就が当分見込めず背景に退くと消えうせますが、あからさまに胸に宿るという筋立てですと、なにもかも神経を逆なでするものに変えます。

以上のような理由で、幸福な情念がわたしたちを引きつける力は、恐ろしい・心しぼませる情念よりも、ずっと弱いのです。わたしたちは、自然で心地よいそんな希望を挫く力をもつどんなことにもわなない、かくて、恋する人が不安になり・懸念をもち・

(15) Abraham Cowley (1618-67) ; Petrarch (Francesco Petrarca, 1304-74) ; Ovid (43 BC-AD 17) ; Horace (65-8 BC).

(16) ここで言及されるのは、Tibullus, *Elegies* と、ヘシオドスの *Works and Days* 171, Pindar, *Olympian Odes*, II. 68ff., Lucian, *A True Story*, II, et al. にみえる不思議な楽園の島々についての記述であり、プラトンが *Symposium*, 180b でそのように呼んだ島では、有徳な人たちは死後、常夏の暮らしを送る。

辛酸を味わう場面に没入します。

3　近代の悲劇や物語のなかに、この情念がまこと驚くほど人目をひきつけると映る作品があるのは、上記の理由によります。『孤児』のなかでわたしたちの関心をつなぎとめるのは、カステーリオとモニマイアの恋愛であるよりも、むしろその恋愛がもたらす辛酸です。[17] 身の安全が完全に保障されている場面に恋人同士のふたりを登場させ、互いに愛してやまぬ思いを打ち明けさせる作家がいるとすれば、そこで掻き立てるのは笑いであって共感ではありますまい。この種の場面を悲劇に挿入するのが許されるとしても、多少は不適切であるのは避けられませんし、観客がその場面を我慢して見ていられるのは、そこで打ち明けられる情念に共感するからではなく、その情念の成就にはどうやら危険と困難がつきまといそうだと観客に予見され、それが気がかりだからです。

4　社会の諸法は、女性が気弱であることを慮って女性に奥ゆかしい態度を強要しますが、そんな態度をとらねばならないために、恋愛は女性の身には特に辛酸に満ち、また、まさにそのせいで、恋愛はいっそう興味を強くそそるものになります。フェードルという女性の名を題名にもつフランス悲劇でこの女性の恋心が打ち明けられると、恋愛につきまとう放埒と罪のかぎりが尽くされるにもかかわらず、わたしたちは彼女の恋心に魅了されます。[18] まさにその放埒と罪深さこそ、多少ともわたしたちのあいだでこの作品が人気を博している理由であるといってもよいでしょう。それと相まって、彼女の恐怖心・羞恥心・悔恨・戦慄・絶望は、いっそう自然で興味をそそるものになります。恋愛の境遇から湧き上がるこれらの情念は、妙な呼び方かもしれませんが、第二次的情念であって、そんな感情はすべて、一段と激しく荒れ狂うにちがいなく、わたしたちが適切に共感するといえるのは、この第二次的情念に対してだけです。

5　しかし、対象の価値と比べてまこと桁違いに不釣合いなあらゆる情念にあって、唯一、恋愛感情だけは、どこか気品があり、また心地よく、どんな木偶坊にもそう映ります。第一に、恋愛感情それ自体は無粋であっても、その自然本性からして毛嫌いされませんし、恋愛がもたらす帰結はしばしば致命的でおぞましくても、その意図にほとんど害意はありません。

第二に、恋愛感情それ自体にほとんど適切さはありませんが、この情念にいつもまとわりつくある種の情念には相当な適切さがあります。恋愛感情には、情け深さ・高潔無私・親愛・友情・敬意が色濃く混ざり合っており、わたしたちは、そんな情念が多少過剰であることに気づいていても、他のどんな情念にもましてそれらに共感するきわめて強い傾向をもっています。その理由についてはすぐあとで説明しますが、[19] それらの情念に共感することで、それらがまとわりつく恋愛感情はあまり見苦しくないものになり、恋愛に普通つきまとう悪徳のかぎりが尽くされるにもかかわらず、想像のなかで支持されます。

もとより、恋愛によって女性はきっと零落し悪名にまみれ、また、恋愛をかすり傷程度に理解する男性はほとんどいつも、働く意欲をなくし、義務を怠り、名声を軽んじ、世間並みの評判ですら軽蔑します。こんな悪徳のかぎりが尽くされるにもかかわらず、恋愛感情には細やかな神経と高潔無私の美徳が多少はまとわりつくと思われているために、多くの人にとって恋愛は、見栄の対象になります。ですから、恋心は実際に味わったら何の名誉ももたらすまいに、人々は、[そんな美徳の証として] 恋心を感じる素質を見せたくてしかたありません。

6　上と同じような理由から、自分自身の友人、自分自身の研究、自分自身の職業について話すときには、しかるべき奥ゆかしさが不可欠です。そんな事柄はどれも、わたしたちの興味と同じ程度にまで同席者の興味を引くとは期待できない話題です。要するに、この奥ゆかしさが欠如しているから、人類の半分はもう半分の人類と不仲になり、哲学者は哲学者とだけつきあい、クラブのメンバーは自分が所属する狭い仲間内でつきあうのです。

(17) Thomas Otway (1652-85) 作の *The Orphan* (1680) は、II. iii. 3. 5. および *Rhetoric*, 21. ii. 92. でも論じられている。
(18) Jean Racine (1639-99) 作の *The Phedre* (1677).
(19) I. ii. 4.

第三章　人といがみあう情念について

1　さて、つぎなる区分の情念は、やはり想像から引き出されるにもかかわらず、わたしたちがそこに入り込んで気品があるとか似つかわしいとみなすには、つねに低く抑えられ、その調子は、自然本性が躾けられないと高じる線よりずっと低くなければなりません。

この情念とは、憎しみと憤りであり、様々な制約のもとで生ずる亜種の感情をすべて含みます。そんなすべての情念では、わたしたちの共感は、その情念を感ずる人と、その情念をぶつけられる標的の人との間で引き裂かれます。これら二人の利害は真っ向から対立します。わたしたちが、憎しみや憤りを感ずる人に共感してそれに衝き動かされ、「起こってほしい」と願うことは、もう一方の当事者に共感してその同類感情に導かれ、「起こらないでほしい」と願うことなのです。彼らはふたりとも人間ですから、わたしたちは両人のことが気がかりであり、一方がこうむるかもしれない苦しみを案ずるわたしたちの恐怖心は、他方がこうむった苦しみを案ずるわたしたちの憤りを鈍らせます。

したがって、腹立たしい扱いを受けた人にわたしたちがよせる共感感情は、当人を自然にいきり立たせる情念にはどうしても及びませんが、それは、およそ共感感情を当事者感情より希薄にする一般的諸原因のせいばかりでなく、憤りの共感感情それ自体に固有な特別の原因、つまり、憤りをぶつけられる相手にわたしたちがよせる逆方向の共感感情のせいなのです。ですから、憤りが、品位をもち、心地よくなるには、ほかのほとんどの情念にもまして、自然に高じて達する調子よりも控え目に、低く抑えられなければなりません。

2　同時に、世人は、他人に加えられた権利侵害に対してとても強い感覚をもっています。悲劇や物語で、わたしたちが悪党にぶつける怒りは、英雄に注ぐ同情心と親愛の情に引けをとりません。わたしたちがイアーゴにぶつける嫌悪の情は、オセローに払う敬意に劣らず強く、前者の処罰において味わう歓喜は、後者の辛酸を見て味わう悲痛に引けをとりません。[20]

しかしです。世人は、同胞市民に加えられる権利侵害に対してまことに強い同類感情をよせますけれども、被害者が権利を侵害

されたとき見せる憤りが強ければ、それだけ強く憤るというわけではありません。大抵の場合、被害者が覇気を欠いているとか、彼が我慢したのは恐怖に駆られたせいだと映らないかぎり、被害者の忍耐・温厚・情け深さが深大であれば、それだけ世人が加害者にぶつける憤りは強まります。被害者の人柄がいつくしまれるものであるために、その権利侵害は陰惨だという感覚が世人に沸き立つのです。

3　しかし、憎しみや憤りは、人間の自然本性の特徴としてなくてはならない要素であると考えられます。罵倒されてもおとなしく黙って座り、言いなりになり、反撃も仕返しも試みない人は、軽蔑に値する身になります。わたしたちは、その人の無頓着・無神経に入り込んでゆけずに、彼の態度を意気地なしと呼びますが、そんな態度は、敵対者のいばった態度と同様、わたしたちを本気で立腹させます。見物の人だかりでさえ、見くびられ・いじめられるのに我慢して言いなりになる人を見ると激高します。群衆は、眼前のいばった態度が憤りで応じられ、しかもそれに苦しむ当人がそんな応酬に出るのを見たくてしかたありません。彼らはその人に向かって「自分の身を守れ、自分の手で仕返しをしろ」と怒鳴ります。彼がついに一念発起して怒るなら、彼らは心から喝采を贈り、彼の怒りに共感します。群衆は、彼の怒りによって、自分たちが敵対者にぶつける怒りを生々しくよみがえらせ、彼が敵対者に反撃するのを見て快哉を叫び、彼の仕返しが常軌を逸しないかぎり、あの権利侵害がまるでわが身に加えられたものだったかのように、それによって心底腹の虫が治まります。

4　しかしです。［被害者の］憎しみや憤りは、侮辱や権利侵害を加えることを［加害者にとって］リスクの高い行為にしますから、被害者個人に役立つということは承認されるかもしれません。また、憎しみや憤りは、正義とその分け隔てない執行の後見人として少なからず公衆に役立つということも後述するとおりです。[21]

（20）シェイクスピアの *Othello* に関して類似の指摘が *Rhetoric* 21. ii. 91にある。
（21）II. ii. 3.

七九

それにもかかわらず、憎しみや憤り自体にはどこか心地悪いところがあり、そのせいで、この情念が他人の外見に表れると、嫌悪されるのが自然な対象になります。目の前にいる相手に向かって怒気を露わにすることは、「あなたの悪事はわかっています」と素っ気なく通告する域を超えれば、相手への侮辱であるばかりか、その場に居合わせる全員への粗暴な態度とみなされます。一座の人々に対する配慮があれば、わたしたちはまことけたたましい・神経を逆なでする情動に屈しないよう気を引き締めていたはずです。

憎しみや憤りがしばらく経ってもたらす効果は心地よくても、それが即時にもたらす効果は、そんな情念をぶつけられる人に起こる害悪です。しかし、想像力にとって対象が心地よく見えたり心地悪く見えたりするのは、その対象が即時にもたらす効果のせいであって、しばらく経ってもたらす効果のせいではありません。

公衆にとって監獄が宮殿よりも有益であることは確かであり、一般には、監獄を建設する人夫は、宮殿を建設する人夫よりも、ずっとまっとうな祖国愛の精神に導かれます。しかし、監獄が即時にもたらす効果は、ならず者をそこに閉じ込めて隔離することであって心地悪いものです。また、想像力は、監獄がしばらく経ってもたらす効果を突き止める時間的余裕をもたないか、あまりにも遠くから見ているせいで、その効果から大して影響を受けません。ですから、監獄はいつだって心地悪い対象であり、それが所期の目的に適っていればいるほどそうでしょう。他方、宮殿はいつだって心地よいものですけれども、それがしばらく経ってもたらす効果は公衆に不都合なことが多いかもしれません。宮殿は、贅沢を促進するのに役立ち、気風のみだれの手本を示すかもしれません。しかし、宮殿が即時にもたらす効果は、そこの住人が味わう住み心地のよさ・快楽・にぎわいであって何もかも心地よく、想像力に無数の心地よい観念を示唆します。ですから、想像力はおしなべて、そんな観念に安閑としており、宮殿がもたらすもっと先々の結果を捜して前進することはめったにありません。

楽器や農具をかたどって絵とか漆喰細工にした記念品は、会堂や食堂によくみかける心地よい装飾です。同種の記念品で、外科手術の道具、解剖・切断用の刃物、骨を切るのこぎり、穿孔用の道具などを図柄にしたものが飾られるとすれば、見当はずれであり、気分を害するでしょう。しかし、外科手術の道具は、農具よりも、いつだってぴかぴかに研がれていますし、概して所期の目的に一段と見事に適合しています。さらに、外科手術の道具がしばらく経ってもたらす効果は、患者の健康であって心地よいのに、

それが即時にもたらす効果は痛みと苦しみですから、その道具を見るといつだって不愉快になります。

戦争の道具は、心地よいものです。もっとも、戦争の道具が即時にもたらす効果は、手術の道具と同じく痛みと苦しみであると思われるかもしれません。しかし、その場合の痛みと苦しみは、敵側のそれであって、わたしたちはそれに共感しません。味方のことになると、戦争の道具は、勇気・勝利・名誉といった心地よい観念と即座に結びつけられます。したがって、戦争の道具の実物は、衣装につけるとびきり高貴な一品になり、また、その実物をかたどったものは、建築物を飾るきわめて上等な一品になると思われています。

以上のことは、心の資質にも当てはまります。古代のストア哲学者たちの意見はつぎのようなものでした。「世界は、知恵・権力・善良さをそなえた一神の、万物を支配する摂理によって統治されている。だから、どんな出来事もひとつ残らず、宇宙のこの計画になくてはならない要素であり、その全体の一般的な秩序と幸福の促進を指向するとみなされなければならぬ。それゆえ、人類の悪徳と愚劣も、その知恵や美徳と同じく、この計画になくてはならない要素であり、また、それは、悪質なものから良質なものを抽出する不朽の技術によって、知恵や美徳と同じく、自然の偉大なシステムの順境と完成をもたらす傾向を授けられる。」[22]

しかし、この種の理論的思索は、たとえどんなに深く心の奥底に根ざしていようとも、悪徳を前にしてわたしたちが自然にもつ嫌忌の情を弱めることはできますまい。なぜなら、悪徳が即時にもたらす効果はまこと破滅的である反面、悪徳がしばらく経ってもたらす効果はあまりにも遠い先のことなので想像力によって突き止められないからです。

5　以上のことは、たった今わたしたちが考察してきた情念にも当てはまります。人といがみあう情念が即時にもたらす効果はまことに心地悪いため、それがずいぶん正当な理由から噴き出すときでも、この情念にはやはりどこか嫌気を催すところがあります。ですから、前述のとおり［I.i.1.7-8］、憎しみと憤りだけは、その情念が表明されても、それを掻き立てる原因について知らされるまで、わたしたちはついその気になって共感しようと身構えたりしません。

(22) VII.ii.1.参照。

八一

不幸を嘆く甲高い声が遠くから聞こえると、わたしたちはその声のぬしに無関心ではいられないでしょう。その声が耳に響くと、わたしたちは、たちまちその人の運勢に引きこまれ、それがやまなければ、ほとんど反射的にその人の救助に飛んでいかないわけにいきません。同様に、微笑んでいる表情を見れば、物思いに沈んだ気分さえ、陽気でうきうきした気分へと高揚し、そのせいでつい思わず、その笑顔が見せる喜びに共感してそれを分かち合わずにいられません。すると、それまで思い煩って、縮こまり・へこんでいた心は、とたんに膨れ上がり晴れやかな気分になります。

しかし、憎しみと憤りを表に出す所作についてはかなり事情が違います。のどをからして怒るけたたましい耳障りな声が遠くから聞こえてくると、わたしたちの心には恐怖心や嫌悪感が湧き立ちます。わたしたちは、痛みに身もだえして叫ぶ人のところには飛んでいくのに、怒声のするほうにはそうしません。女性や度胸のない男性は、怒りの標的が自分でないのはわかっていても、恐怖で震え、まいってしまいます。しかし、彼らが怖がるのは、怒りの標的である人物の境遇にわが身を置くことによるのです。もっと頑強な心の持ち主でも、怒声を耳にすると心をかき乱されます。たしかに、怒声は、彼らを怖がらせることはできませんが、怒らせるだけの力はもっています。彼らが怒るのは、他人の境遇に自分がいると仮定してそう感じるからです。同様なことが憎しみにも当てはまります。むしゃくしゃする気持ちをそのまま表に出しても、そんな気持ちを湧き立たせてだれかに人を憎ませることはできません。むしろ、憎まれるのは、そんな態度の当人です。

憤りも憎しみも、その自然本性からしてわたしたちが嫌悪する対象です。その外見が心地悪くけたたましいせいで、わたしたちは共感感情を掻き立てられず、共感しようと身構えることもなく、むしろ共感を妨げられることが多いのです。

わたしたちは、他人のなかに悲痛があるのを認めて彼に釘づけにされ・引きつけられ、一方、他人のなかに憤りや憎しみがあるのを認めて、しかしその原因を知らないうちは、彼に嫌気を催し・彼から離れます。そのとき、悲痛が人々を結合する力は、憤りや憎しみが人々を分離する力に及びません。「人間をお互いに離れ離れになるように追い立てるこれらの情動は、荒々しく、いつくしまれることがないだけに、その分、通い合うのを難しくし、めったに通じ合わないようにしておこう」というのが自然の意図であったように思われます。

6　音楽は、悲痛や歓喜の抑揚を写し取るとき、実際にそうした情念を湧き立たせ、少なくとも、ついそんな情念を心に持とうという気分にします。一方、音楽は、怒気の声色を写し取るとき、恐怖心を湧き立たせます。歓喜・悲痛・愛情・賞賛・献身はどれも、その自然本性からして音楽的です。それらの自然な音色は、みな柔らかく明澄で快く響き、それらを自然に表現する楽節は、規則正しい休止符で区切られ、それゆえ、呼応しあう旋律が規則正しく反復することにたやすく適合します。これとは逆に、怒気やこれに類するすべての情念の音声は、やかましく、協和しません。その楽節もまったく不規則で、とても長かったりとても短かったりして、規則正しい休止符で区切られません。ですから、音楽がこうした情念を写し取るのは難しく、やっと写し取ってもそんな音楽の聴き心地は満点ではありません。音楽会の全演目が、人とむつみあう心地よい情念を写し取った曲ならば、不適切ではありませんが、どれもこれも憎しみや憤りを写し取った曲ならば、奇妙な音楽会でしょう。(23)

7　憎しみと怒気は、観察者にとって心地悪いとすれば、それを味わう当人にとっても同様に心地悪いものです。憎しみや怒気は、善良な心の幸福にとってたまらなくひどい毒です。そんな情念をまさに味わっているとき、やかましく・きりきりした・痙攣するような感じがあり、また、心を引き裂き・動転させ、心の落ち着き・穏やかさを跡形もなく壊すような感じがあります。けれども、そんな心穏やかこそ、幸福にとってまこと不可欠であり、憎しみと怒気とは反対の感謝や愛の情念によって最もよく促進されるものです。

高潔無私で情け深い人が、共に暮らす人の裏切りや恩知らずにあうとき、悔しくてたまらないと彼らに思わせる理由は、それによって失うものの価値の大小ではありません。彼らは何を失ったとて、それがなくとも概してとても幸せでいられます。彼らの心をこの上なくかき乱すのは、わが身の上に裏切りや恩知らずが実行されたという観念であり、「この観念が掻き立てる不協和の心地悪い情念こそ、我々がこうむる権利侵害の核心である」と彼ら自身は判断します。

(23)　スミスの音楽理論については'Of… the Imitative Arts', II とその添付文書、とくにその II. 13（in *EPS*）を参照。

8　憤りを晴らす行為がすっかり心地よいものになり、観察者がわたしたちの仕返しに存分に共感するには、どれほど多くの条件が必要でしょうか。まずは、腹立たしい扱いの程度が、そんな扱いをされながら多少とも憤らなければ軽蔑に値し、末代まで侮辱される目にあうというほどひどくなければなりません。侵害の程度が小さければ小さいほど、いつだって無視するのが上策であって、どんな些細な口論の場面でもすぐカッとなり・強情で言いがかりをつける気性ほど、見るに耐えないものはありません。

わたしたちが憤るのは、この心地悪い情念がわが胸に荒れ狂うのを感じるからであるよりも、憤りの適切さについての感覚、つまり、「世人がわたしたちに憤ることを期待し・要求する」という感覚からでなければなりません。およそ人間の心に宿る情念のうちでも、それが正当かどうかについてこんなにも疑ってかからねばならない情念はなく、また、それが大目に見られてよいかどうかについて、わたしたちに自然に湧く適切さの感覚とこんなにも注意深く照合し、冷静で公平な観察者の感情はどんなだろうかとこんなにも熱心に考えなければならない情念はありません。

矜恃とは、すなわち、社会に占める自分自身の地位身分と威厳を維持しようと配慮することであり、これこそ、この心地悪い情念の表現に気高さを与えることができる唯一の動機です。この動機が、わたしたちの風体と所作全体の特徴でなくてはなりません。そんな風体・所作は、淡々・堂々として・まっすぐであり、決然としているが積極的に何かするわけでなく、気分は高揚しているが威張ったところがなく、癇癪や下品な悪口とは無縁であるばかりか、わたしたちを侵害した相手にさえも、高潔無私・率直であり、あらゆる適切な配慮に満ちているにちがいありません。

要するに、情け深さを大げさに誇示しようと骨折らなくても、それが憤りのせいでわたしたちの物腰全体からかき消えていないと映り、また、わたしたちが復讐心の指令に屈するとしても、しぶしぶ、やむにやまれずそうするのであり、しかも、ひどく腹立たしい扱いが繰り返されたあげくであると映るにちがいありません。憤りは、こんなふうにして監視・制限されるとき、高潔無私で気高いとさえ認められてかまいません。

第四章　人とむつみあう情念について

1　すぐ上で述べた区分の情念はすべて、大抵の場合、まことはしたなく・心地悪いものになりますが、それは、共感感情が打ち消し合うせいです。しからば、つぎなる区分の情念は、上の情念の対極にあり、共感感情が相乗するせいで、ほとんどいつでも格別に心地よく、しっくりしたものになります。

高潔無私・情け深さ・親切・いたわり・互いの友情と敬意、これらはすべて、人とむつみあい他人の幸福を願う心の動きであり、表情や態度に表されると、わたしたち自身と特に縁のない人たちに注がれる場合でも、それを見る・利害に囚われない観察者をほとんどいつでも愉快にします。

観察者がそんな情念の持ち主によせる共感と、その持ち主が情念の対象によせる関心は、ぴったり波長が合います。観察者は、人間である身としてその対象の幸福にいやおうなく関心をもち、その関心あればこそ、同一対象に情動をはたらかせる別人の感情への同類感情を瑞々しくよみがえらせます。ですから、わたしたちはいつも、他人の幸福を願う心の動きに思わず共感する・きわめて強力な心理的習性をもつのです。

そんな心の動きは、どこから見ても心地よいとわたしたちの目に映ります。わたしたちは、他人の幸福を願う心情の持ち主とそれを注がれる対象の双方にやどる満足感に入り込んでいきます。思えば、憎しみや怒りの対象であることは、大変な苦痛であって、勇猛な男が敵から加えられるのではないかと恐れるどんな害悪もこれに及ばず、しからば、慕われているという意識に含まれる満足感は、幸福にとって大変重要であり、優美繊細な神経の人が幸福から引き出せると期待するどんな福利もこれに及びません。

友人のあいだに不和の種を蒔き、こよなく心優しい彼らの愛を血みどろの憎しみに変えて喜ぶ者の人柄ほど、いとわしいものがあるでしょうか。では、まこと忌み嫌われるこんな権利侵害の陰惨な感じは、何を本質とするのでしょうか。それは、友情が続いていたとすれば互いに相手から期待できたはずのささやかな善の計らいを彼らから奪い去ることでしょうか。それは、まさに友情そのものを彼らから奪い去ること、友人同士がまこと大きな満足感を引き出す源泉の・通い合う親愛の情を彼らから盗み取ること、つまり、彼らの心が奏でる調和を妨害し、以前には彼らのあいだに息づいていた幸せな付き合いを終わらせることです。相互

の親愛の情、同心の調和、年来の付き合いは、幸福にとって大変重要であり、幸福から期待されるどんなささやかな献身裨益にも勝るのであって、このことは、心優しく繊細な人だけでなく、世にも無骨な庶民でさえ感じています。

2　愛は、それ自体がこれを味わう当人にとって心地よい感情です。愛はその胸をなごませ・落ち着かせますし、生命運動に有利な条件であり、人間の体質の健康な状態を促進するように思われます。また、愛は、これを注がれる対象の胸に感謝と満足の気持ちを掻き立てるにちがいなく、相手のそんな気持ちを意識して一段と甘美なものになります。愛し合う当人たちは、互いに配慮を注ぎあうことによって、かわるがわる幸せな心境になり、ほかの皆は、この互いの配慮に共感して彼らのことを心地よいと感じます。

ある家族には、互いの愛情と敬意がくまなくゆきわたり、両親と子供たちは互いに仲間同士であって、違いは、一方にある尊敬に満ちた親愛の情と、他方にある優しい包容力だけから生じ、家族はのびのびとし、愛してやまず、茶化しあい、お互いに思いやり、そんな様子からは、対立する利害に兄弟が引き裂かれたり、ひいきしてもらおうと姉妹が張り合って仲たがいしたりすることは窺われず、そこにある何もかもが、平和・朗らかさ・調和・充足感を表す観念をいだかせる。そんな家族を目にするならば、わたしたちはどんなにうれしい気持ちになるでしょう。

逆に、ある家屋では、きりきりした口論によってそこに住む人々がふたつに割れて反目し、また、取り繕ったなごやかさと愛想のよさが漂うなか、不審そうな顔色に情念がさっとうごめき、そのせいで互いの猜疑心が暴かれて胸の奥で燃え上がり、一つ屋根の下にいる必要から押し付けられた堅苦しい規律をことごとく突き破って出ていこうと隙をねらっていることが露わになる。そんな家屋に足を踏み入れるならば、わたしたちはどんなに不安な気持ちになるでしょう。

3　上のいつくしまれる情念は、過剰と認められる場合でも、嫌悪の目でみられることはけっしてありません。また、友情と情け深さは、弱々しくてもどこか心地よいところがあります。過保護な母親、甘すぎる父親、むやみに気前がよく・親身になりすぎる友人は、たぶん根っからの優しい性質のために、見ていてある種身につまされる時があるにしても、そんな思いには愛情が絢い交

ぜになり、憎しみや嫌悪の目で見られることはけっしてなく、軽蔑されることさえありません。そんな目で見る人がいるとすれば、世にも粗野でとりえのない人だけでしょう。彼らの愛着を野放図だと非難するわたしたちの胸には、いつだって心配があり、同情心と親切心があります。

底抜けに情け深い人柄には、無防備なところがあり、なによりもそれが、わたしたちを身につまされる思いに引き込みます。底抜けの情け深さそのものには、人柄をはしたなくしたり、心地悪くしたりするものは何も含まれません。ただわたしたちは、それが世間にはふさわしくないことを悔やむばかりです。なぜなら、世間は底抜けの情け深さに値しないからであり、また、そんな情け深さを授かる人はそのせいで食い物にされて、巧みに取り入る虚言の裏切りと恩知らずに加え、無数の苦痛や不安にさらされるにちがいないからです。しかし、あらゆる人間のなかで彼ほど、そんな苦痛や不安を感じるいわれのない人はほかにいませんし、また、概して彼ほど、そんな苦痛や不安に耐えられない人もほかにいません。

憎しみと憤りについては、話はまったく別です。そんないとわしい情念にやたら激しく駆り立てられる性分の人は、万人からあまねくおぞましい・忌々しいと思われる対象になり、野獣のように、市民社会の全域から狩り出されて仕留められるべきであるとわたしたちは考えます。

第五章　私事にかまける情念について

1　つぎなる区分の情念は、上の相対する二つの区分の情念、つまり、人とむつみあう情念といがみ合う情念の中間地点を占めるともいえるものです。人とむつみあう情念は、時には上品であるのに、この情念はけっしてそうでなく、人といがみ合う情念は、時には毛嫌いされるのに、この情念はけっしてそうではありません。

悲痛と歓喜は、私生活上の運勢の良し悪しが原因で心にいだかれると、この第三の区分に属する情念になります。この情念は、過剰な場合でも、けっして過剰な憤りほど心地悪くありません。なぜなら、わたしたちが打ち消し合う共感感情に引き込まれてそれに反発することはありえないからです。また、この情念は、対象にきわめてふさわしい場合でも、公平な情け深さや、正当に他

人の幸福を願う気持ちほど心地よくありません。なぜなら、わたしたちが相乗する共感感情に引き込まれてそれに味方することはありえないからです。

しかし、悲痛と歓喜とのあいだには次のような違いがあります。それは、一般にわたしたちがつい共感せずにいられない歓喜は、ささやかなものであり、一方、つい共感せずにいられない悲しみは深大なものである、ということです。

運勢が急転して突如それまでの生活条件よりもずいぶん上等な暮らし向きに引き上げられる人は、どんなに親しい友人からの祝辞でも、そのすべてが完全に誠実であるとはかぎらないと高をくくるかもしれません。成り上がり者は、どんなに大きな功労のぬしであろうと、一般には心地悪く、ふつうわたしたちは、嫉妬心に邪魔されて、彼の歓喜に心から共感することができません。このことは、成り上がり者に少しでも分別があればわかることです。彼は、好運で晴れやかになった様子を見せず、むしろ、喜びを押しころし、彼をとりまく新たな事情から自然に湧き立つ心の興奮を低く抑えようと精一杯努力します。彼は白々しく、以前の身分にお似合いの地味な服を今も着てみせ、以前の身分にふさわしい慎み深い態度を今もしてみせます。彼は、昔馴染みへの気遣いを倍にして、これまで以上に謙虚に・ぬかりなく・愛想よくしようと努めます。

一方、わたしたちは、こんな態度こそ、成り上がりの境遇にきわめてふさわしいと是認します。その理由は、わたしたちが彼の幸福をねたみ嫌悪するとき、彼がそこによせる共感は、わたしたちが彼の幸福によせる共感より強くなければならない、という期待があるからだと思われます。

しかし、こんな努力にもかかわらず成り上がり者が首尾よくやりとげることはめったにありません。わたしたちは、彼の謙虚な態度が真摯なものだろうかと嫌疑をかけ、一方、彼は、このようにがんじがらめにされてくたびれます。ですから、概して彼はほどなく、追い抜いた昔馴染みをすべて残して先に進みます。ただし、昔馴染みのなかでもきわめて卑しい幾人かについては、おそらく身を落として彼の子分になるでしょうから、見放されることはありますまい。また、彼は、新しい友人をつねに得るとはかぎりません。知り合って日の浅い人たちの自尊心は、彼を自分たちの同格者と認める時に見くびられたと感じ、それは、昔馴染みの自尊心が彼を上司に頂く時に感じたのと同様、強いものです。

一方、成り上がり者が、知り合ったばかりの人や昔馴染みに無念の思いをさせたことをわびるには、きわめて頑固で粘り強い慎

みを要します。概して成り上がり者は、あっというまに神経をすり減らしてくたびれ、昔馴染みの陰険な疑り深い自尊心と、知り合ったばかりの人たちの隠し味のきいた軽蔑に挑発され、憤然として前者には無視を決め込み、後者には癇癪で応じ、ついには、いばった態度が身についてしまって、みんなから見向きもされなくなります。

人間の幸福の核心は、慕われているという意識から湧く――わたしはそう信じていますが、もしそうであれば、運勢がそんな急に上向いても、幸福を大いに増進することはまずありません。もっとゆっくり上流身分に進んでゆく人こそ、この上なく幸福です。なぜなら、当人が昇進の各段階に至るずっと前から、その到着は既定のこととしてあらかじめ公衆によって決められ、そうであればこそ、予定通り昇進するとき、当人に野放図な歓喜が掻き立てられることはありえず、また、彼に追いつかれた人たちに猜疑心が生まれることも、追い抜かれた人たちに嫉妬心が生じることも、常識的には起こりえないからです。

2　しかし、世人は、さほど重要でない原因から生じる比較的ささやかな喜びには、わりあいとすばやく共感します。順風満帆の境遇にあって謙虚にふるまうことは節度ある態度ですが、一方、日常生活のどんなにささやかな出来事、たとえば、昨晩過ごした夜会とか、面前で催された音楽会とか、居合わせた語らいの場のふとした何気ない事への言いぐさ・しぐさとか、そんな人生のつれづれを埋めるささいな何でもない事にはすべて、わたしたちはいくら存分に満足感を表明しても足りません。

習慣として身についた朗らかさほど、上品なものはありません。この朗らかさの根底にあるのは、日常茶飯の出来事がもたらすささやかな楽しみを何でも面白がる独特な風流心です。わたしたちは、そんな朗らかさに即座に共感するのであって、それを見ると、この幸福な心理的習性の持ち主に訪れるどんな些事にも同じ喜びで心を弾ませ、同じ心地よい観点からそれを心に浮かべます。

にぎわいの季節である青年期が、まことたやすくわたしたちを魅了し親愛の情をいだかせる理由はそこにあります。この喜びやすい気性は、青春を益々高ぶらせて若く美しい瞳からほとばしるように思われ、それが同性の若者に見られる場合でも、年寄りさえ刺激して普段よりも喜ばしい気分にします。年寄りは、自分の心身の衰えをしばし忘れ、久しく遠ざかっていた心地よい観念や情動に耽溺します。それは、久しくご無沙汰していても、まこと大きな幸福が訪れて年寄りの胸に呼び戻されると、そこに旧友のように座を占めます。年寄りはこの旧知の友からずっと離れていたことを残念に思い、こんなに久しく別れていたからこそ、いっ

八九

そう心を込めて旧友を抱きしめます。

3　悲痛については、話はかなり違います。つまらないことでくよくよしても人の共感を掻き立てませんが、深刻なあえぎ苦しみは、この上なく強い共感を呼び起こします。

ふと生じた心地悪い小事をことごとく不安がる人、料理人や食堂支配人が義務をほんの少しでも果たさなければ気分を害する人、どんなに格式の高い儀式に参列しても自分やほかの人に示された無作法を逐一気にする人、仲の良い友人と昼前に会ったとき相手がおはようと挨拶しなかったり、兄弟に面と向かって話をしているのに相手がのべつ鼻歌を歌ったりしたことに気を悪くする人がいます。また、田舎にいるとき天候が悪いとか、旅行中、道が悪いとか、町にいるとき連れ立っていく人がいないばかりか、催し物は何もかも退屈だとかで、機嫌を損ねる人がいます。こんな人は、なにがしかの理由があるとお察ししますが、大して共感されることはありますまい。

歓喜は愉快な情動であり、わたしたちはどんなにささいな場面でも人目もはばからず嬉々としてそれにひたります。ですから、わたしたちは、他人の胸の歓喜にも、嫉妬によって偏見をもたなければいつだってすばやく共感します。

しかし、悲痛は痛々しく、わたしたち自身に起こった非運でも、自然に心はそれに抵抗し、そこから跳ね退きます。わたしたちは、悲痛をいささかもいだくまいとし、いだいたとしてもすぐにそれを振り払おうと努力するでしょう。たしかに、ずいぶん些細なことがわが事として起こるとき、わたしたちは悲痛を嫌悪するからといってそれをいだかないわけではありません。しかし、同じく些細なことが原因で他人に悲痛が掻き立てられる場合、わたしたちは悲痛を嫌悪するせいで、それに共感することを絶えず妨げられます。なぜなら、わたしたちが共感を通じていだく情念は、当事者として味わう情念よりも、いつだって御しやすいからです。

さらに、世人には意地悪さがあって、小さな心配ごとへの共感をことごとく妨害するばかりか、そんな心配ごとを多少とも憂さ晴らしの種にします。ですから、わたしたちはだれしも、仲間がつまらぬことでくよくよしているのを見て取ると、茶化して面白がり、その人はあっちでもこっちでも小突かれたり、はやしたてられたり、からかわれたりします。ごく普通にきちんと躾けられ

て育った人たちは、ふとした小事が苦痛をもたらしても何もなかったかのように装いますし、もっと社交に長けた人は、自分から進んでそんな小事をことごとく茶化しますが、それは、自分がやらなければ仲間が代わりにやることを知っているからです。世間で暮らし、「わが身にかかわる万事は他人の目にどんなふうに映るのか」を考える習慣が身につくと、そんなつまらない災厄は他人からきっと無粋に思われると分かり、自分の心にもそれは同じく無粋な様子で浮かび上がるのです。

4　これとは反対に、深刻な辛酸によせる共感は、ずいぶん力強く、とても誠意があります。このことは例示するまでもありません。わたしたちは、架空のものとして上演される悲劇を見ても涙を流します。ですから、あなたが重大な災厄に見舞われて苦労したり、常ならぬ非運が起こって、無一文になり、疾病にかかり、不名誉にまみれ、失意の底に突き落とされたりすれば、たとえあなた自身の落ち度がその非運の一因だったとしても、概してあなたは、友人皆のこよなく誠意ある共感にすがってよいし、利益と名誉が守られるかぎり、彼らのこよなく親切な支援を頼ってかまいません。しかし、もしあなたの非運がこんなおぞましい類のものでなく、自分の野心を満たす途中ですこし足踏みしただけだったり、恋人に振られただけだったり、妻にいつも小言を言われびくびくしているだけならば、知り合いからこぞって茶化されること請け合いです。

セクションⅢ　世人が行為の適切さについて下す判定に、順境と逆境が及ぼす効果について。また、順境にいるほうが、逆境にいる場合よりも、世人から是認をすんなりと得られる理由について

第一章　わたしたちが悲しみによせる共感は、喜びによせる共感よりも概して生々しい感懐であるのに、通常、それは主たる当事者が自然に味わう激しい情念には遠く及ばないということ

1　わたしたちが悲しみによせる共感は、喜びによせる共感ほど真に迫っていないのに、そんな共感よりも注目されてきました。「共感」の語が表示するもっとも固有で原初的な意味は、他人の苦難によせる同類感情であって、他人の享楽によせるそれではありません。先ごろ他界したある哲学者は創意に富み・細部を見分ける人で、「わたしたちは歓喜に心から共感する」、「祝辞を捧げ

るのは人間の自然本性の原理である」という命題を議論によって論証しなくてはならないと考えました。[24] 一方、いたわりがそうしたものであることを論証しなければならないと考えた人はひとりもいなかったとわたしは思います。

2　まずいえるのは、悲しみによせる共感は、喜びによせる共感よりも、ある意味では普遍的だということです。悲しみが度を越しても、相変わらずわたしたちはそれになにがしかの同類感情をよせることができます。たしかに、この場合、わたしたちが味わう感情は、是認の本質――完全な共感、および、感情同士の完全な調和と共振共鳴――には届きません。わたしたちは、苦境にあえぐ人と泣いたり、わめいたり、嘆いたりはしません。それどころか、わたしたちは、彼が気弱であり、その情念が野放図であることに気づいています。が、それでもなお、しばしば彼のことが気がかりで傍目にもはっきりわかるほど心配します。一方、わたしたちは、他人の歓喜にすっかり入り込んで歩調を合わせることがない場合、その歓喜に対してどんな配慮もせず、なんら同類感情を持ちません。羽目を外し意味もなく喜んで狂喜乱舞する人は、わたしたちが一緒になってひたれない喜びをいだいており、軽蔑と怒りの対象です。

3　さらに、苦痛は、心のそれでも肉体のそれでも、快楽より鋭利に感じられる作用であり、わたしたちが共感を通じて苦痛によせる感情は、苦しむ当事者が自然に味わう感情に遠く及びませんが、喜びの共感感情よりも、概して生々しく克明に感受される作用です。もっとも、すぐあとで述べるとおり、喜びの共感感情は、苦痛のそれよりも、当事者に湧く情念の自然な躍動感に接近することが多いのですけれども。[25]

4　以上の事実に加え、わたしたちは、他人の悲しみによせる自分の共感感情をしばしば懸命に低く抑えようとします。苦しむ当人の目が届かないときにはいつだって、わたしたちは、自分の勝手次第で、その共感感情を封じ込めようと精一杯努力し、そのあげく成功するとはかぎりません。わたしたちはこの悲しみの共感感情に反発し、それにいやいやながら屈するわけですから、どうしてもこの共感感情に格別な注意を払わずにはいられないのです。

逆に、わたしたちは、他人の喜びによせる自らの共感感情に対してこんなに反発する必要はありません。この場合に嫉妬心が少しでもあれば、共感したいという衝動をまったく感じませんが、それがなければ、ためらわず喜びの共感感情に身をゆだねます。

逆に、わたしたちは、自分の胸の嫉妬心をいつだって恥ずかしいと思いますから、この見苦しい感情が他人の喜びへの共感に差しつかえる場合、しばしばまことしやかに他人の喜びに共感し、ときには本心からそれに共感したいと念じます。隣人の好運に接し、本心はおそらく実に残念でならないのに、「お喜びいたします」と言います。わたしたちは、悲しみの共感感情を胸の内から追い払いたい時によくそれを味わいますし、喜びの共感感情を嬉々として味わいたい時にそれが湧かないのをしばしば寂しいと思います。ですから、「悲しみに共感したいという衝動はずいぶん強く、喜びに共感したいという衝動はずいぶん弱いにちがいない」という知見は一見して明らかで、自然に立てようと思いつく命題です。

5　しかし、この固定観念にもかかわらず、「嫉妬心がない状況では、喜びに共感したいという衝動のほうが、悲しみに共感したいという衝動よりもずっと強い」という命題、「この心地よい情動に対するわたしたちの同類感情のほうが、あの痛々しい情動に対するそれよりも、主たる当事者に自然に湧く感情の躍動感にずっと接近する」という命題をわたしはあえて肯定したいと思います。

6　わたしたちは、度を越した悲痛にすっかり歩調を合わせるというわけにはいきませんが、大目に見るというところがあります。苦境にあえぐ人が自分の情動を低く抑え、観察者の情動と完全に調和・共振共鳴させるには、どんなに途方もない努力が必要であるか、わたしたちは知っています。ですから、たとえ当人の努力が失敗しても、わたしたちは彼を易々と許します。しかし、羽目を外した歓喜に対してはそのように寛大ではありません。なぜなら、わたしたちがすっかり入り込んでゆけるところまで歓喜を低

(24) Joseph Butler (1692-1752), *Fifteen Sermons Preached at the Rolls Chapel* [1726], v, para. 2.

(25) すぐあとに続くいくつかのパラグラフ。I. ii. 1, III. 2. 15, VII. ii および *Rhetoric*, XVI. 参照。

く抑えるのにそんな大きな努力が要るとは思わないからです。

どんなにひどい災厄に見舞われても自分の悲しみを制御できる人は、最高の賞賛に値すると思われますが、順風満帆の境遇にあって同じように自分の喜びを制御できる人がいても、賛辞に値するとは到底思われません。主たる当事者が自然に味わう感情と、観察者がすっかり歩調を合わせられる感情とを隔てる道のりは、悲しみのほうが喜びの場合よりも、はるかに長いことをわたしたちは承知しています。

7　健康で負債がなく良心にやましいところがない人の幸福、これに付け足すものが何かあるでしょうか。こうした境遇の人に付加されるどんな蓄財も余分だ、と言っても適切であり、彼がそんな余分の財貨を得たせいで大いに気持ちを高ぶらせるならば、とんでもなくうわついた軽薄さのしわざにちがいありません。

しかしながら、この境遇は、世人の自然で標準的な暮らし向きであると言って一向にかまいません。世の中に不幸や堕落が現にあり、嘆きの声はまこと正当であるにもかかわらず、人々の大半はまぎれもなく、健康で負債がなく良心にやましいところがない暮らしをしています。ですから、大半の人々は、この境遇への付け足しによって仲間にいかにも掻き立てられそうな歓喜の絶頂にまで、さしたる困難もなく自分でも駆け上がり浮かれ調子になります。

8　しかしです。健康で負債がなく良心にやましいところがない人の幸福にほとんど何も付け足すものはないとしても、そこから多くのものが失われる事態はありえます。この幸福な暮らし向きは、人間に訪れる順境の絶頂まではほんのわずかな道のりですが、不幸のどん底からは仰天するほど途方もなく隔たっています。だからこそ、人の心は、順境のせいでその自然な状態から上方に駆け上がって高ぶるよりも、逆境のせいで苦しんでそこから下方に突き落とされて落胆する度合いのほうが、どうしてもずっと強いのです。したがって、世の観察者は、順境の人の喜びに隈なく入り込むよりも、逆境の人の悲しみにすっかり共感して完全に同じ拍子を打つほうが、ずっと難しいと認めるにちがいなく、また、喜びに共感するときよりも、悲しみに共感するときのほうが、わが胸の自然な普段の気分からはるかに遠ざかるにちがいありません。だからこそ、わたしたちが悲しみによせる共感は、喜びに

よせる共感よりもしばしば鋭利な感懐であるのに、主たる当事者が自然に味わう感情の激しさにはいつだってはるかに及ばないのです。

9　歓喜に共感することは心地よく、嫉妬心が反発しなければ、その甘美な感情がどんなに強く我を忘れさせるものであっても、わたしたちの胸はいつも心ゆくまでそれに耽溺します。一方、悲痛に歩調を合わせることは苦痛であり、わたしたちがそこに入り込んでいくのはいつも不承不承です。(a)(26)

わたしたちは悲劇の上演を観るとき、その出し物によって湧き立つ悲しみの共感感情に負けまいと精一杯奮闘し、もはやそれに抗しきれなくなり、ようやくついに屈するわけですが、そんなときでも、自分の気がかりな様子を同席した仲間に知られないように努めます。少しでも涙を流せば注意深くそれを隠し、「この過剰な心優しさに入り込まない観客から女々しく気弱だと思われては困る」とわたしたちは心配します。

破産者は、その非運のせいでわたしたちからいたわりを乞いますが、彼の悲しみに入り込もうとするわたしたちのためらいはどうやら大きいと感じて、びくびく気後れしながらその悲痛を打ち明け、その半分を封印さえして、世人のこんな薄情さのせいで、自分のあえぎ苦しみを洗いざらいぶちまけるのを恥ずかしく思います。

成功を喜んでお祭り騒ぎする人の場合、話は別です。わたしたちが嫉妬心に引き込まれて彼に反発しなければ、彼はわたしたち

(a)　わたしの考えに対する異議としてつぎのようなものがありました。すなわち、わたしは、是認感情の根底に共感感情をすえ、そして、その是認感情はつねに心地よいのであるから、およそ心地悪い共感感情を認めることはわたしの学問体系と矛盾する、というのです。これに対してわたしは、以下のとおり回答します。是認感情のなかには二つの要素が存在するということが注目されなければなりません。第一に、観察者にやどる共感感情。第二に、観察者自身のこの共感感情と、主たる当事者に当初に湧く情念が、完全に波長が合っているのを観察者が察知することから湧き上がる情動。この第二の情動こそ、是認感情が適切に成立する要件であり、それはいつでも心地よく甘美です。第一の共感感情は、主たる当事者がいだく情念の自然本性に応じて、心地よい場合もあれば、心地悪い場合もあります。なぜなら、第一の共感感情には、主たる当事者の情念の特徴が、いささかなりともつねに残存しているにちがいないからです。

九五

からいつだって完全きわまりない共感を期待します。ですから、彼は、わたしたちが心の底から思わず彼に歩調を合わせると信じきり、臆せず快哉を叫んで胸の内を公然と示します。

10　なぜ、わたしたちは同席者がいる前で、笑うよりも泣くことを恥ずかしがらねばならないのでしょうか。わたしたちは、こらえきれずに泣いてしまうことも多いし、同じくこらえきれずに笑ってしまうことも多いのですが、そんなときいつも感じるのは、「世の観察者がわたしたちに歩調を合わせるときの足取りは、どうやら痛々しい情動の場合は重く、心地よい情動の場合は軽そうだ」ということです。たまらなくおぞましい災厄にふさぎこんでいるときでさえ、苦情を述べることはつねに惨めです。しかし、勝利して得意満面であることは、はしたないとはかぎりません。もちろん、予見注意力は、「もっと控えめに順境を嚙みしめるのがよい」としばしば助言するでしょう。なぜなら、まさしくこんな得意満面ほど、ややもすると嫉妬を掻き立てがちなものはなく、予見注意力はそんな嫉妬を避けなさいと教えてくれるからです。

11　凱旋式や入城式を見物する人だかりは、まったく嫉妬心をいだきませんから、その歓声はなんと屈託のないものでしょうか。また、通常、処刑を見物する彼らの悲痛は、どんなに物静かで控えめなものでしょうか。葬列に加わるわたしたちの悲しみは、せいぜい取り繕った沈痛の域を出ないのに、洗礼式や結婚式に参加するわたしたちの賑わいは、いつでも心の底からであり、わざとらしいところは少しもありません。

こうした心楽しい場面ではいつだって、わたしたちの満ち足りた気持ちは、さほど長続きしなくとも、主たる当事者のそれと同じく生き生きしていることが多いものです。わたしたちが真心を込めて友人に祝辞をささげることがほんのまれにしかないのは人間の自然本性の不名誉ですが、そんな祝辞をささげるときにはいつでも友人の歓喜はそっくりそのままわたしたちの歓喜になり、その席上、わたしたちは友人と同じように幸せであり、胸は真の喜びでふくらみ・あふれかえり、目からは歓喜と安堵がほとばしり出て、顔つきやしぐさをことごとく高ぶらせます。

12　しかし、これとは反対に、打ちひしがれる友人に弔辞をささげるとき、わたしたちの感情は、友人がいだく感情に比べて何と微々たるものでしょうか。

わたしたちは友人の傍らにすわり、彼らのほうを向き、一方、彼らは非運にまつわる事情をわたしたちに語り伝え、その間、わたしたちは沈痛な面持ちで注意深く耳を傾けます。しかしです。彼らは語っているさなか、自然にこみ上げてくる情念に咽び、一言いうたびに言葉は途切れ、あやうく窒息しそうに思われることもよくあるのに、わたしたちの胸の情動はのろく、感極まった友人の情動に拍子を合わせるのは困難をきわめます。わたしたちはそれを聞きながら、同時に、「友人の情念は自然であって、同じ

（26）第二版から第五版までのこの註には、以下の文章が続く。「わたしの考えでは、ふたつの音は、それぞれを単音として取り出してみれば殺風景かもしれませんが、にもかかわらず、それらが完全に協和音であるならば、それらが調和し波長が合うのを感じ取ることは心地よいかもしれません。」ヒュームは、スミスが『道徳感情論』の第二版を準備しているのを聞いて、ここで話題になっている異議を提起した。「あなたは『あらゆる種類の共感は必然的に心地よい』という命題が真であることをもっと念入りに、そして十全に証明していればよかったのに、とわたしは思います。この命題はあなたの学問体系のかなめでありますのに、あなたはこの問題に二〇頁〈I.i.2.6〉でそっけなく触れるにすぎません。さて、心地よい共感感情とともに、心地悪い共感感情があるというのは事実であるように思われます。つまり、たしかに、共感を通じて湧く情念は、主たる当事者について内省することから得られる写像なので、そこには当事者の資質が含みこまれ、その資質が苦痛を与える場合には、共感感情も苦痛を与えるにちがいありません。たしかに、わたしたちは、自分がすっかり共感できる人と語らうとき、つまり、温かで親密な友情がある場合、そんな交流の友好的な打ち解けた感じは、心地悪い共感感情の痛みを圧倒し、その共感の働き全体を心地よいものにします。けれども、通常の場合、このようなことはあり得ません。機嫌が悪い仲間、すべてにうんざりし嫌気がさした人、いつも退屈している人、病身で・苦情を訴え・金に困っている人、そんな人は、明らかに同席者を気落ちさせますが、そうなる理由は共感によって説明されると思われ、しかもその共感は心地悪いものです。もしすべての共感が心地よいとすれば、悲劇を見て涙・悲痛・同情心を催すことはありえない話でしょうから、そんな涙・悲痛・同情心から喜びがいだかれる理由を説明するのは困難な問題であるとつねに思われます。そうでなければ、病院は舞踏会よりも人を楽しませる場所でありましょう。わたしは、この命題が九九頁と一一一頁〈I.ii.5.4. & I.iii.1.9〉であなたに忘れられているか、あるいはむしろ、その箇所におけるあなたの推論と縺れ合ってうやむやになっているのではないかと思います。あなたははっきりと、『悲痛に歩調を合わせることは苦痛であり、わたしたちがそこに入り込んでいくのはいつも不承不承です。』と言っています。おそらくあなたは、この感情の様相を変えるか、説明するかして、あなたの学問体系と折り合いをつけなければならないでしょう。」Letter No. 36, 28 July 1759, *Corr.*, p. 43. スミスの回答は手紙を添えて Gilbert Elliot (Letter No. 40, 10 October 1759, *Corr.*, p. 51) にまず送られ、そのあと、一七六一年に第二版に挿入された。

ような場面にいれば自分でもいだく水準にとどまっている」と気づいているかもしれません。わたしたちは、自分に細やかな神経が欠けているために内心わが身を叱責し、おそらくそのせいで、「無理やり同情心をこしらえて持ちなさい」と自らを叱咤することだってあります。しかし、そんな同情心をひねり出しても、これほど、つねにかすかで移ろいやすいものを想像することはできず、それはおしなべて、わたしたちが部屋をあとにしたとたん消えうせ、二度とよみがえってきません。

自然は、わたしたちの肩にわたしたち自身の悲しみを背負わせたとき、もうそれで十分だと考えたように思われ、ですから、他人の気を紛らわせてやりたい気持ちになるのに必要な分量の悲しみは別として、それ以上に他人の悲しみを分かち合いなさいとは命じなかったのだと思われます。

13　他人が打ちひしがれているのに人はこんなに鈍感な神経しかもたず、であればこそ、ひどい辛酸のさなかでも矜恃をもっていられることは、いつでもまことに神々しいほど品位ある態度と映ります。数多くの取るに足らない災いのさなか、朗らかさを保っていられる人の態度は、育ちのよさを感じさせ心地よいものです。しかし、これと同じような態度でたまらなくおぞましい災厄を耐え忍べる人は、いつか衰え死ぬ人間の境涯の彼岸にいると映ります。

彼の境遇におかれるならば、だれしも激しい情動に不安をあおられ・動転するのが自然ですから、わたしたちは、「そうした激しい情動を鎮めるにはどんな途方もない努力が要るだろうか」と感じ、彼がまこと隅々まで自分自身を制御できる事実を認めて仰天します。

それと同時に、彼の不撓不屈は、わたしたちの鈍感な神経とすっかり波長が合っています。わたしたちは、そんな鋭敏な神経を持ち合わせていないことを自分でも認め、また、そのせいで気が滅入っていますが、彼は、そんな鋭敏な神経をわたしたちに持ちなさいと要求したりはしません。彼の感情とわたしたちの感情のあいだにはきわめて完全な共振共鳴があり、だからこそ、彼の態度にはきわめて完全な適切さがあるのです。また、わたしたちが経験で知っているように、人間の自然本性は優柔非力なのが普通であることからすれば、彼の態度の適切さは、常識的には崩さず保てると予想できなかったものです。わたしたちは、まこと気高く高潔無私の努力をなしうる強靱な心にびっくり仰天し、驚嘆の声をあげます。完全な共感・是認の感情は、そこに驚嘆・驚愕が

混ざり合って高ぶると、賞賛の念と呼ばれるのが適切な感情を形づくりますが、この点についてはすでに一再ならず注意を促してきました[27]。

カトーは四方を敵に囲まれ、抵抗不能になったとき、降伏を潔しとせず、当時の誇り高い処世訓に従い自害を余儀なくされました。しかしそのとき彼は、決して自らの非運に縮み上がったり、惨めな同情の涙を切羽詰った情けない声で哀願したりしませんでした。わたしたちにとってそんな涙を流すことは、いつだってまことに気が進みません。逆に彼は、男らしい勇猛さを全身にみなぎらせ、最期の決断を実行に移す直前、いつもの心穏やかさを保ち、味方の安全を図るために必要なすべての指令を出しました。こんな光景は、不動心の道を説いた偉大な教師セネカの目に、ほかならぬ神々でさえもこれを見ればうれしく賞賛するほどのものと映っています[28]。

14　わたしたちは、ふだんの生活でこんな英雄の矜持を示す例に出くわすと、いつだってきっと感極まります。わたしたちは、こんなふうにわが身に対して感ずるところがまったくない人たちを前にすると、悲しみからすっかり気弱になってそこに浸る人たちを前にするより、ともすれば泣いて涙を流しがちです。殊にこの場合、観察者が共感によっていだく悲痛の感情は、主たる当事者に当初に湧く情念をしのぐと映ります。ソクラテスの友人たちは、彼が毒杯を飲み干したとき、みな泣きましたが、ソクラテス自身は、思い切り陽気で快活な心穏やかさを表していました[29]。

こんなすべての場面で、それを見た観察者は、悲しみの共感感情を制する努力をしませんし、そんな努力をする必要もありません。観察者は、悲しみの共感感情のせいで我を忘れて野放図・不適切な言動をしはすまいかと恐れていません。むしろ彼は、自分自身にこまやかな神経があることをうれしく思い、安堵と自己是認の感情を味わいながら悲しみの共感感情に屈します。ですから、観察者は、友人の災厄を心配し、たぶんこれまで彼のために心やさしく涙ぐむ愛情にさほど胸を突かれたことはなくても、およそ

(27) I. i. 4. 3 & I. ii. 1. 12.
(28) Seneca ('the Younger', c. 4 BC–AD 65), *De Providentia*, ii. 9.
(29) Plato, *Phaedo*, 117b-e.

自然に心に浮かぶどんなに憂鬱な見方にも喜んでひたります。

しかし、以上のことは、主たる当事者にはまったく当てはまりません。彼は、自分の境遇に当然伴うひどい事情や心地悪い事情から、できるだけ目をそらそうとせずにはいられません。そんな事情にあまりにも真剣な注意を傾けると、まこと凶暴な印象がわが胸に刻印され、金輪際、抑制の効いた行動の規矩を守れないのではないか、また、世の観察者から完全に共感・是認される対象になれないのではないか、と彼は恐れます。ですから、主たる当事者が集注するのは心地よい事情だけであり、「自分の態度が示す英雄の矜恃によって、いざ喝采と賞賛に値せん」と一心に思うわけです。「自分は、まこと気高く高潔無私の努力ができ、こんなおぞましい境遇にあっても、かくありたいと願うとおりの行動ができる」と感じて、彼の心は、喜びで高ぶり・我を忘れ、そして、こんなふうに非運を打ち負かして勝利に酔いしれる得意満面の様子を崩さず保てるのです。

15　逆に、わが身に降りかかった災厄のせいで悲しみと失意の底に沈みこむ人は、いささかなりとも卑小で見るにたえないと常に映ります。わたしたちはそんな彼を前にしても、彼がわが身を案じていだく感情、さらには、わたしたちが彼の境遇にいるとすればたぶんわが身を案じていだく感情を、味わう気になれません。そういうわけで、わたしたちは彼を見下します。おそらくそんな態度は不当なのでしょうが、わたしたちが自然本性からしてどうしても感じずにはいられない定めの感情を不当とみなしても意味はありません。[cf. III. 5. 9]

悲しみから気弱になることは、どこからみても心地よいとは映りません。ただし、それが、自分自身を案ずるよりも、他人を案じて味わう悲しみから起こる場合は別です。仰ぎみる慈父を亡くし、息子が悲しみに屈するとしても大して非難はされません。彼の悲しみの根底にあるのは、もっぱら亡くなった親によせる一種の共感感情であり、わたしたちは即座に彼の情け深いこの情動に入り込んでゆきます。

しかし、彼が自分だけに降りかかった非運のせいで同様な気弱さにひたれば、もはやこんなに大目にはみられません。たとえば、彼が物乞い・破滅の身に突き落とされたり、とてつもなくおぞましい危険に身をさらしたり、あるいは、処刑のために公衆の前に引っ立てられて処刑台に一粒の涙を落としたりするだけでも、永久に彼の顔に泥を塗る――気骨があり高潔無私の世人は皆、そう

判断します。もとより、そんな世人のいたわりは、彼を前にすればずいぶん強く、とても誠実でしょうが、相変わらずそんな度を越した気弱さには手を差し伸べませんから、世間の目を気にせずにそんな醜態をさらせる人を大目にみることはありますまい。彼の態度に世人の心が動かされるのは、悲しみのせいであるよりも、むしろ恥ずかしさのせいです。彼がそんなふうにしてわが身に背負った不名誉こそ、彼の非運にまつわるもっとも嘆かわしい事情であると世人の目には映ります。大胆不敵なビロン公爵は[30]、戦場でまことたびたび死をも恐れぬ武勇を示したのに、その最期は、彼亡き後の記憶を汚す・まことに不名誉なものでした。公爵は、自分のなれの果てを見て、自らの勇み足のせいで寵愛と栄光の座からまこと不運にも振り落とされたことを思い出し、処刑台で泣いたのです。

第二章　野心の起源について。また、身分地位の区別が生まれてくる原因について

1　世人が思わずよせる共感は、わたしたちの悲しみよりも喜びに対して隈なく行き届きますが、これこそ、わたしたちが自分の金品をひけらかし、貧困をひた隠す理由です。わたしたちは自分の辛酸を公衆の視界にやむなくさらけだし、その境遇は世人すべての目におおっぴらになっているのに、だれ一人、こんなわたしたちを案じてその苦しみの半分も心にいだきはしないと感じると、何にもまして気が滅入ります。いや実は、おもにこんな世人の感情に配慮するからこそ、わたしたちは金品を追い求め、貧困を避けるのです。

思えば、現世で黙々せかせかと汗水たらして働くのはいったい何のためでしょうか。がめつさと野心の目的は何でしょうか。なぜ富を求め、権力を求め、身分地位の昇進を求めるのでしょうか。それは、自然の必需品をまかなうためでしょうか[31]。どんなに下層の労働者の賃金によっても必需品をまかなうことはできます。周知のように、それだけの賃金があれば、食料や衣料が買え、家

(30) Charles de Gontaut (1562-1602), duc de Biron, アンリ四世治下のフランス大元帥およびブルゴーニュ総督。反逆罪により処刑された。

(31) スミスは「自然的欲求」という観念を *LJ*(A) vi. 7ff & (B) 205ff で詳述する。「必需品」と「贅沢品」という発展的区分については、*WN* V. ii. k. 2-3 を見よ。本章における心理学的テーマをさらに掘り下げた箇所として IV. 1 を見よ。

屋を住み心地よくし、家族が快適に暮らせます。この賃労働者の家計を精査すればわかることですが、彼は賃金の相当部分を快適な備品に費やし、それは余裕の品々であると考えられてよく、また、特別な機会には、見栄を張り人目を引くためにだって贈り物をする余裕があります。

では、わたしたちがこの彼の境遇を嫌悪する理由はどこにあるのでしょうか。わりあい上流身分の生活のなかで教育を受けた人たちは、「労働しなくてよいとしても彼と同様の粗食で生きるのを余儀なくされ、彼と同様の長屋に住み、彼と同様に粗末な衣服を身にまとうくらいなら死んだほうがましだ」とどうして思うのでしょうか。彼らは、自分の胃袋のほうが上等だとか、小屋よりもお城のほうがぐっすり眠られると想像するのでしょうか。その逆こそ、しょっちゅう見聞されてきた事実であり、一度も見聞されたことがなくてもまこと明々白々であって、それを知らない人は一人もいません。[cf. IV. 1. 10]

では、さまざまな身分の人たちすべてに脈打つ競争心は、いったいどこから湧きあがるのでしょうか。わたしたちは、生活条件の改善と称する人生の偉大な目的を掲げて、どんな福利を得るつもりなのでしょうか。それは、共感・安堵・是認の感情を込めて見守られ・注目され・注意を払われることであり、生活条件の改善から何か福利を引き出そうとして手に入れられるのは、これ以外ではありません。わたしたちの関心を引くのは見栄であって、くつろぎや楽しさではありません。しかし、見栄の根底につねにあるのは、われこそ注目され・是認される対象であるという信念です。(32)

裕福な人は自分の富に鼻高々ですが、それは、「富のせいで世間の関心は、自然に私の身に引き寄せられる」、「世人は、この境遇の数々の福利によって瞬時に私の心に湧き立つ心地よいすべての情動にひたり、思わず私に歩調を合わせる」と感じるからです。そう考えると彼の心は、おのずと体中にふくらみ広がるように思われますが、この福利こそ、彼が富を愛してやまない一番の理由であって、富が届けるそのほかの福利は二の次なのです。

これとは反対に、貧しい人は、自分が貧しいことを恥ずかしく思います。彼は、「貧困のせいで世人の目が届かないところに置かれている」、「世人が私に注目するとしても、私をさいなむ不幸と辛酸にはほとんど同類感情をよせてくれない」と感じます。彼は、自分が無視され、かつ、否認されるというふたつの理由によって気が滅入ります。これらはまったくちがう事柄ですが、無名の闇は、名誉と是認が放つ陽光からわたしたちを覆い隠すので、だれからも注目されないという感じは、人間の自然本性から生ず

るどんな心地よい希望もきっとしぼませ、どんな燃え盛る欲望もきっとくじきます。貧者は出かけ、そして帰宅しますが、見向きもされず、雑踏のただなかにいるときも、まるで自分の陋屋に閉じこもっているのと同様、無名の闇にいます。

ぞんざいな心遣いしか受けられず、とげとげしいまなざしを向けられる事態は、貧者の境遇にいる人たちの頭から離れませんが、それは、遊蕩に生き・にぎわいを求める人からすれば、まったく面白くないことです。彼らは貧者から目をそむけ、貧者の辛酸が惨状を極めるせいでどうしても目がいく場合でも、「こんなに心地悪い対象は自分たちのあいだから追っ払え」というつもりでしかありません。また、好運に恵まれた人、見栄を張る人からすれば、人間の無残な状況がのさばっているのは驚きであり、「臆面もなくそんな事態が私たちの前に訪れ、その不幸のむかむかする形相で身の程知らずにも私たちの静穏な幸福を邪魔したりするかしら」と不審に思います。

貧者の場合とは逆に、身分と誉れが高い人は、世間の耳目をことごとく集めます。みんな必死になって彼を見ようとし、彼をとりまく事情によって自然に彼に湧き立つ喜び・得意を、少なくとも共感を通じていだこうとします。彼の行動は、公衆から気遣われる対象であり、彼の言葉やしぐさでまったく見向きもされないものは、ほとんど一つもありません。大勢が一堂に会すれば、彼こそ、一同から視線を注がれる人であり、一同は、彼の挙動と指示を受け取って胸に刻もうと、わくわくしながら一切の情念を彼にかしずかせるように思われます。彼の態度がまったくの見当はずれでないかぎり、彼はいつでも、世人の関心を呼び、周囲の皆から見守られ・同類感情をよせられる対象になる機会に恵まれています。

そうであればこそ、上流身分は、堅苦しい規律を課され、不自由が付きまとうものなのに、羨望の的になるのですし、また、上流身分を手に入れようとすれば黙々と働き、一喜一憂し、気が滅入るあれこれを経験しなければならないのに、また、もっと大切なものである余暇・やすらぎ・気兼ねのないくつろぎを、上流身分になった暁には永遠に奪われるのに、そのすべてをことごとく埋め合わせるだけのことはある、と世人は判断するのです。

(32) VI. iii. 33-47 & 51-2を参照。スミスは、マンデヴィルが見栄について論じたところを丹念に研究していた。VII. ii. 4-6-12を参照。

一〇三

2　わたしたちが上流身分の生活条件に思いをはせるとき、想像力はややもすると人目を欺く彩りでそれを描きがちですが、それは、完成された幸福な暮らし向きを表す抽象的観念であるといって大過ないと思われます。それは、わたしたちがどんな白昼夢やとりとめのない夢見心地にひたるときも、あらゆる欲望の最終目標として漠然と描き・掲げていた暮らし向きにほかなりません。ですから、わたしたちは、そんな暮らしをする人たちの満ち足りた気持ちに格別な共感をよせます。

わたしたちは彼らのあらゆる欲求に好意をよせ、そのすべての願いが実現するのを手助けします。何かの理由でまこと心地よい境遇が台無しにされ・朽ち果てるとすればどんなに哀れだろう、とわたしたちは思いますし、彼らが不死身であってほしいと願いさえするかもしれません。そんな完全な享楽がついには死によって終わりを告げられるのは非情だとわたしたちには思われます。彼らが自然のおきてに従ってみずからの占める高貴な地位を離れ、自然がその子ら皆に用意してくれ・粗末ながら温かくもてなしてくれる住処に追いやられるのは残酷だ、とわたしたちは思います。「偉大なる王よ、永遠なれ」という献辞は、そんなばかげたことはないと経験が教えてくれなければ、たちまち東洋人がする追従の礼法に則って捧げられるでしょう。

およそ上流身分に災厄がふりかかり、権利侵害が加えられると、それが観察者の胸に掻き立てるいたわりと憤りは、同じ事態がほかの人の身に起こった場合より十倍も強く観察者に感じられるでしょう。悲劇にふさわしい主題を提供するのは王の非運だけであり、この点で、それは恋人たちの非運と似ています。これらふたつの境遇は、舞台でわたしたちの興味を引く主要なものです。なぜなら、理性と経験が反対の声をどんなに上げたところで、想像力の固着観念は、これらふたつの状態に、他の状態に勝る幸福を結びつけるからです。万事楽しいそんな状態を邪魔したり、終わらせたりすることは、あらゆる権利侵害のなかでも一番陰惨であると思われます。国王の命を狙ってはかりごとをする反逆者は、ほかのどんな殺人犯よりもひどい怪物とみなされます。内戦で流された無辜の血潮をすべて集めても、それによって炸裂した怒りは、チャールズ一世の死によって炸裂した怒りに及びませんでした。

人間の自然本性について知らない人は、「人間は自分より下位の人たちの不幸には無関心なのに、自分より上位の人たちの非運や苦難を前にすると悔しさや怒りを感じる」という事実を目撃すると、ややもすれば「上位の身分階層の人たちのほうが、下層身分の人たちよりも、苦痛にあえぎ苦しみ、死の痙攣におびえるにちがいない」と想像しがちです。

3　上のように世人は、金持ちと権力者がいだくどんな情念にも歩調を合わせる心理的習性をもち、これこそ、身分階層の区別と社会秩序の根底にあるものです。

わたしたちが自分より上位の身分にこびへつらうのは、彼らの善意からもらう恩恵を人知れず期待するからであるよりも、大抵は、彼らの境遇に由来する数々の福利を賞賛するからです。[33] 彼らの恩恵が潤す範囲は高が知れているのに、彼らの財貨は、ほとんどすべての人の関心を引きます。わたしたちは、彼らがいよいよ完成に近づいた幸福の体系を仕上げるのを手伝いたいと恋い焦がれ、彼ら自身のために奉仕したいと願いますが、そこからの見返りは、彼らに貸しを作るという見栄や名誉でしかありません。彼らの欲求にかしこまって従う心の底には、そんな服従の効用やそれによって最もよく支えられる現行の社会秩序への配慮は、ほとんど、あるいはまったくありません。現行の社会秩序が「上位身分に反発せよ」と要求するように思われるときでさえ、わたしたちはそうする気に到底なれません。

「王は人民の下僕であり、公衆に便宜をはかる必要に応じて、服従され、抵抗され、王座を追われ、処罰される定めである。」これは、理性と哲学の教義ですが、自然の教義ではありません。自然はわたしたちに、「王自身のためを思って彼らにひれ伏しなさい」「彼らの高貴な身分の前では震え上がり頭を垂れなさい」「彼らの微笑は、どんな献身をも埋め合わせる充分なねぎらいであると考えなさい」「彼らの不興を買うことは、そこから他の害が生じなくとも、これほどひどく気の滅入ることはないと考えておのきなさい」と教示するでしょう。王をともかく人の子として扱い、王とともに日ごろ推理し議論を交わすためには、「矜恃だけで高貴な身分に踏みとどまれる人はほとんどおらず、王も同様に、人と気心を通じ、知り合うことによって助けてもらわなければならないのだ」と決心してかからねばなりません。[cf. I. iii. 3. 8 ; II. i. 3. 2]

どんなに強力な動機、どんなに荒れ狂う恐怖・憎しみ・憤りといった情念も、それだけで尊王心というこの自然な心理的習性を

(33)　スミスは、社会契約論を拒否する一方（*LJ* (A) iv. 19 ; v. 114-19, 127, 134 ; (B) 15-18）、世俗統治の原理として二つの基本原理、すなわち、「権威」と「功利」の原理があることを呈示する（*LJ* (A) v. 119ff, (B) 12）。権威あるいは服従の原理は四つの「原因」をもつ。「その原因の第一は…一身専属の資格要件の卓越、つまり、体力・美しさ・敏捷さの卓越、あるいは、知恵および美徳、つまり、予見注意力・正義・勇猛・慎みの卓越性です。…その第二は…年齢の卓越です。…第三は…財貨の卓越です。…第四は…氏素性の卓越です。」（*WN* V. i. b. 5-8）

打ち消すことはめったにできません。つまり、王のふるまいのせいで、大勢の人民が暴力で彼らに反発しようとか、彼らの処罰・退位を見たいとか、そんな気を起こすからには、それが正しかろうと不正であろうと、そんな情念はどれも最高潮に掻き立てられていたにちがいありません。そこまで達していたにもかかわらず、人々はややもすれば、刻一刻と態度を軟化させ、日ごろ身についた態度にたやすく逆戻りし、これまで自分たちの自然な上位者とみなすのがあたりまえだった人たちにかしこまって従いがちです。人々は、わが君主の気を滅入らせることに耐えられません。いたわりがすぐさま憤りに取って代わり、過去に自分たちが受けた腹立たしい扱いをすべて忘却し、忠君を説く昔ながらの主義が息を吹き返し、人々はかつて反発したとき使った同じ暴力を用いて、つぶされた旧来の支配者たちの権威を再び急ぎ打ちたてようとします。チャールズ一世の死は、王家の復古をもたらしました。ジェイムズ二世が海路を逃亡中、住民につかまえられたとき、王に対するいたわりによって、名誉革命はあやうく頓挫しそうになり、革命の進行はそれまでよりも鈍りました。[34]

4　上流身分の人は、公衆の賞賛を手軽な価格で入手できることに気づいていないように思われますか。それとも、ほかの人と同様に、彼らにとっても、公衆から賞賛を買い入れるには汗水たらし・心血を注がねばならないと想像しているように思われますか。貴族の子弟は、その身分階層の威厳を崩さず保ち、同類市民の上に立つのにふさわしくなるために、どんな素養を身につけなさいと教えられているでしょうか。彼らの祖先たちは、その美徳によって同類市民の上に立ちましたが、貴族が身につけるべき素養とは、知識でしょうか、勤勉でしょうか、忍耐でしょうか、克己心でしょうか、ともかく何らかの美徳でしょうか。

彼の言葉、一挙一動は、もれなく人々の耳目を集めますから、彼は、日常の態度にまつわる事情にもれなく配慮する習慣を身につけ、その小さな義務のすべてを寸分たがわぬ適切さで遂行しようと励みます。彼は、自分がどんなに注目されているか、自分のあらゆる欲求に世人が思わずよせる好意がどんなに強いかを知っており、それを思うと自然にのびのび・浮き浮きした気分が湧き立ち、どんなに枝葉末節の場面でもそんな気分で行動します。彼の風貌・物腰・所作には、自身の優越を表す華麗で上品な感性がくまなく刻まれ、それは下級の身分に生まれついた人たちには決して到達し得ないものです。

そんな風貌・物腰・所作は、彼がなるべく手軽に自分の権威に世人を屈服させ、彼らの欲求をわが意のままに支配してゆくため

の技術であって、そんな計画が失敗することはめったにありません。こうした技術は、身分と格式の高さによって支えられ、日常の場面で世間を支配するには十分なものです。

ルイ一四世はその治世の大半にわたり、フランスのみならず全ヨーロッパで偉大な君主のきわめて完全な手本とみなされました。しかし、彼がこの高い評判を得るのに使った才覚と美徳は何だったでしょうか。それは、潔癖でぶれない正義が彼の全事業に備わっていたからでしょうか。それとも、彼の事業に果てしもない危険と困難がつきまとっていたからでしょうか。それとも、彼が事業の遂行に倦むことなく息もつかずに打ち込んだからでしょうか。それとも、彼の該博な知識、機敏な判断力、英雄然とした武勇によるのでしょうか。

彼の高い評判は、こうした資質によって得られたものではまったくありません。しかし、何はさておき、彼はヨーロッパ随一の有力な君主でしたし、その結果、諸王のなかで最高の身分を占めました。というわけで、彼の伝記作家はつぎのように述べています。[35]「彼の姿かたちの上品さ、彼の容姿の堂々とした美しさは、並み居る宮廷貴族をしのいだ。彼の声は気高く心を揺さぶり、彼の面前で恐縮する人たちの心をとらえて放さなかった。彼の足取りや身のこなしは、彼とその身分階層に属する人だけに似つかわしく、ほかのひとがまねをすれば物笑いになっただろう。彼に話しかける人たちはどぎまぎし、このことは、わが身の優越を思って味わう心ひそかな彼の満足感をくすぐった。ある老将は、王に頼みごとをする際に当惑して口ごもり、最後まで話を続けることができないまま、『陛下、わたくしがあなた様の敵の前でもこんなに震えているなどと思わないでいただきたいのですが』と言って、望みのものを難なく手に入れた。」

これらの浅薄な素養は、彼の身分によって支えられ、またいうまでもなく、ほかの才覚や美徳にも支えられましたが、才覚や美徳のほうは月並みな程度を大して越えるものでなかったように思われます。そんな浅薄な素養のおかげで、この君主は同時代の人から敬意を払われる地位を不動にし、また、後代の人からさえも彼亡きあとの記憶に多大な尊敬の念を寄せられました。彼が君臨

(34)「名誉革命」の進展に伴い、ジェイムズ二世（1633-1701）は一六八八年一二月一一日にフランスへの最初の逃亡を図ったが、そのとき、彼の船が底荷を積み増そうとして Faversham に停泊していたところ、地元住民に手荒く扱われた。王は最終的に一二月二三日に逃亡した。

(35) Voltaire, *Siècle de Louis XIV* (1751) ch. 25, Louis XIV (1638-1715), フランス国王。

一〇七

した時代に彼本人が臨席してこんな素養と比較されたら、ほかのどんな美徳も功労がないと映ったと思われます。知識・勤勉・武勇・恵み深さは、そんな素養を前にして震え上がり、恥じ入り、威厳をすっかり失いました。

5　しかし、下級身分の人が頭角を現したいと望むならば、この種の素養によっては不可能です。優雅な応接態度は、上流身分の人たち以外にはほとんど名誉を与えないほど、上流身分ならではの美徳です。伊達男は、上流身分の物腰をまね、自分の常日頃の態度に上流の適切さを装って偉ぶりますが、身分の低さに加えて愚かさと身の程知らずのために二倍の軽蔑で報いられます。だれしも彼のことを一見の価値もないと思っているのに、なぜこの人は、頭のもたげ方やら、部屋を横切って歩くときの腕の所作にずいぶんと一喜一憂しなくてはいけないのでしょうか。彼の心を占めている気遣いは、確かに有り余るほどですが、そこには自分が偉いという感覚も染みついて、ほかの人はだれも歩調を合わせられません。同席者に払うべき敬意を持ちつつも・なるだけ気を使わない態度とあいまち、どこまでも慎み深く地味な態度こそ、無官の私人に表れる主要な特徴でなければなりません。

ひとたび彼が頭角を現したいと望むなら、もっと重要な美徳によらねばなりません。彼は上流身分がもつ従者に匹敵する数の従者を持たねばならず、すると、彼らに支払うお金の原資は、自分の身体の労働と心の活動だけですから、心身の能力を鍛えて伸ばさねばなりませんし、みずからの職業において卓越した知識と、それを活用する卓越した勤勉さを身につけねばなりません。彼は辛抱強く労働し、決然として危機に対処し、辛くても強い意志を貫かねばなりません。こうした才覚が公衆の目に止まるには、彼の事業が困難かつ重大であり、同時にそこに、洞察力がひらめき、さらに、事業を成し遂げようと謹厳かつ息つくひまもなく打ち込むのでなければなりません。

信義を守りつつも目先が利いて注意深く、高潔無私であるばかりか気さくでもあること、これこそ、あらゆる日常茶飯の場面で彼の態度に表れるべき特徴でなければなりません。同時に、きわめて立派な才覚と美徳がなければ適切に行動できないけれども首尾よくやって面目を施せればきわめて大きな喝采が見込まれる境遇に、彼はことごとく進んで身を投じなければなりません。

覇気と野心をもった人が不遇なために落ち込んでいるとき、矢も楯もたまらず一旗挙げる好機はないかと周囲をうかがう心境はいかばかりでしょうか。そんな機会を与えてくれるどんな事情も、彼の目には望ましく映ります。彼は、対外戦争や内乱を見越し

て満ち足りた気持ちになり、心待ちにさえします。戦争や内乱にともなう混乱と流血のかぎりが尽くされたあげく、世人の注目と賞賛を一身にあびる・かねて望んでいた出番が訪れるのを待ち、密かに有頂天になって甘美な思いをいだきます。

一方、身分と誉れが高い人に目を転じれば、彼の栄光の本質は、ひとえに日常の態度の適切さであり、彼はこの栄光がもたらすつつましい名声に満足しており、また、それ以外の名声を手に入れる才覚を持ちませんから、困難や辛酸を伴うおそれがあることに出くわして立ち往生したくないと思います。舞踏会で花形になることが彼の偉大な勝利であり、こっそり策を講じて情事を実らせることが彼の最高の冒険なのです。

彼はあらゆる公共の騒動を嫌悪しますが、それは世人を愛するからではありません。というのは、上流身分は下級身分の人たちをけっして自分と同類の被造者とみなさないからです。また、それは、彼に勇気がないからでもありません。というのは、彼がその点で力不足ということはめったにないからです。彼が騒動を嫌うのは、そんな境遇で要求される美徳を自分が何一つ持ち合わせず、公衆の注意がほかの人たちのせいできっと自分からそれるのを知っているからです。彼は、なにがしか小さな危険に進んで身をさらすかもしれませんし、当世の流行になれば出陣だって辞さないかもしれません。しかし、彼は、忍耐・勤勉・勇猛・深慮遠謀を長い間たゆまず発揮しなければならない境遇を考え、ぞっとして震え上がります。

これらの美徳がそんな高い身分に生まれついた人たちに備わることは到底期待できません。ですから、どんな統治形態の国でも、たとえ王政でも、一般に最高の職位を占め、行政の全業務を取り仕切るのは、中流以下の暮らし向きで教育された人たちです。彼らは、自分の上司に生まれついた人たち皆の猜疑の視線を浴び、憤りに阻まれながらも、持ち前の勤勉と才能によって出世してきました。また、上流身分の人たちは、彼らを最初は軽蔑の目で、後には嫉妬の目で見て、ついには、さもしい卑屈さで彼らにぺこぺこして満足しますが、それこそ、上流身分の人たちが世人から自分に示されるべき態度として願うものです。

6　世人の心の動きをこんなふうに労せずして思い通りに支配できる力を失う事態が起これば、これこそ、上流身分からの没落をまことにいたたまれなくする理由です。

マケドニアの国王一家がパウルス・アエミリウスに連行されて凱旋式に姿を現したとき、彼らはその非運のゆえに、ローマ人民

一〇九

の注目を征服者と二分したといわれます。王族の子どもらは、年端も行かぬために自らの境遇がわからず、その光景を目にした観衆は、表向きの歓喜と盛況のさなか、こよなく優しい悲しみといたわりに胸を突かれました。続いて王の姿が行列に現れました。彼の様子は深刻な災厄をこうむったせいでうろたえ唖然とし、魂の抜け殻のようでした。王の友人と大臣らは王の後に従いました。彼らは行進しながら、しきりに零落した主君に目をやり、その光景に絶えず嗚咽しました。彼らの態度全体は、わが身の非運を何とも思わず、王のずっとひどい非運にすっかり心を奪われていたことを証示していました。これとは反対に、高潔無私のローマ人は、王に侮蔑と怒りのまなざしを向け、そんな災厄に見舞われて生きながらえるような意気地なしは、どんないたわりにも値しないとみなしました。(36)

それにもかかわらず、この災厄の結末はどうなったかといえば、大方の歴史家が伝えるところによると、王は、残りの人生を有力で情け深い人たちの庇護を受けて送ることになり、そこには、豊富な物資・くつろぎ・余暇・身の安全がありました。この状態だけをみればうらやむに値すると見えましょうが、そこから転落することは、王みずからの愚行によってさえもできませんでした。

しかし、かつて王の一挙一動の介添えを慣わしとした道化・ご機嫌取り・家来が、王の周りにちやほやして押し寄せることはもうありませんでした。王が、大勢の人たちから注視され、彼らの尊敬・感謝・愛情・賞賛を自在に操ってその対象になることはもうありませんでした。諸国民の情念が、彼の欲求に倣って成型されることはもうありませんでした。こうしたことこそ、いたたまれない災厄だったのであり、王を魂の抜け殻にし、彼の友人にわが身の非運を忘れさせ、ローマ人の矜持に「生きながらえるほどの意気地なしがいったいどこにいるか」と思わせた理由でした。

7　ラ・ロシュフーコー卿は、「恋心の後に野心が生まれるのはふつうのことであるが、野心の後に恋心が生まれたためしは一つもない」といっています。(37) 野心は、ひとたび胸裏を完全に牛耳れば、競争相手も勝者も容赦しますまい。公衆から賞賛されることに慣れ、あるいは、そんな期待をもつことにすら慣れてしまった人にとって、ほかの楽しみはすべてしぼんで枯れるのです。失脚した政治家はみな、心安らかになるために、野心に打ち勝とう、もはや手の届かぬ名誉を見下そうと苦心してきましたが、いったい何人が首尾よくやり遂げられたでしょう。彼らの大部分は、すっかり気が抜けて砂をかむように味気なくだらだらと時間をつぶ

し、自分の存在に意義はないと思ってがっかりし、無官の生活を支える仕事にも身が入りません。楽しみを味わうのは、かつて上流身分であったことを話すときだけであり、充足感を味わうのは、返り咲きを謀る無益な計略に首を突っ込んでいるときだけです。

宮廷の栄えある隷属と引き換えに自らの自由を断じて売り渡すまい、のびのびと・恐れず・独立して生きていこう。あなたは本心からこう決意していますか。この志操ある決意を保っていくひとつの道があるように思われます。おそらく、それはひとつしかありません。入ったが最後戻ってこられた人も稀なるその場所に、足を踏み入れてはなりません。野心が渦巻く圏内に入ってはなりません。あなたに先んじてすでに世人の半分を釘付けにした地上の大成者とわが身を比較してはなりません。

8　広く共感・注目されることをどこまでも望める境遇にいることは、人間の想像の中で、こんなにも大きな意義があると映ります。たとえば、席次は、市参事会会員の妻たちを仲たがいさせる一大事ですが、生涯の労働の半分をつぎ込む目標であり、それはまた、がめつさと野心によってこの世に持ち込まれたあらゆる波乱と空騒ぎ、あらゆる強奪と不正義の原因です。

たしかに、常識ある人たちは、席次を軽蔑すると言われます。つまり、食卓の上席に座ることを軽蔑し、だれが一座を見下ろす上席に指名されても、その理由となる事情はどんなわずかな優勢によっても逆転できる小事なので、席次に無関心なのです。

しかし、身分や誉れが高く傑出することを見下す人はいません。もしいるとすれば、その人は、人間の自然本性の標準的な規準をはるか上回るところに達しているか、それをはるか下回るところに沈み込んでいるか、どちらかでしょう。すなわち、その人は、知恵と真の学問にゆるぎない信頼を置いているせいで、「適切なふるまいをして是認される正しい対象になったからには、注目されなくても是認されなくても大したことではない」と泰然としていられる人であるか、さもなければ、自分自身を卑下する考えが身についてしまい、働きもせず酒瓶片手に我関せずの生活に沈淪しているせいで、向上の意欲をすっかり忘れ、それを夢見ることすらほとんどできない人です。

(36) Plutarch (46-120), *Parallel Lives*, Aemilius Paulus, 33-4 参照。
(37) François duc de La Rochefoucauld (1613-80), *Maximes* (1665), No. 490.

9　このような次第で、世人から心躍る祝辞をもらい・共感をこめて見つめられるのが自然な対象になることは、燦然と目もくらむ華やかさを順境に添える事情なのですが、しからば、わたしたちの非運が同胞市民から同類感情でなく、軽蔑や嫌悪を注がれる対象であると感じることは、なによりも暗澹たる逆境の闇を大いに深くします。

これこそ、最もおぞましい災厄が、最も耐えがたい災厄とはかぎらない理由です。小さな災いに遭った身で人前に出るのは、ひどい非運に見舞われて人前に出るよりもしばしば気を滅入らせます。小さな災いは、共感感情を掻き立てませんが、ひどい非運は、被害者のもがき苦しみに匹敵する共感感情を掻き立てずとも、鮮烈ないたわりを呼び起こします。後者の場合、世の観察者たちの感情は、被害者の感情からさほどかけ離れてはいず、彼らの同類感情は不完全ながら、相手が不幸に耐えるのをいささか手助けします。

ジェントルマンは、にぎやかな集まりの場に汚らしいぼろをまとって出るほうが、血にまみれ傷だらけで出るよりも気が滅入るでしょう。血まみれ・傷だらけになった姿をみて一座は身につまされる思いに引き込まれますが、汚らしいぼろを身にまとう姿をみれば、どっと笑うでしょう。

裁判官が犯罪者をさらし台につなぐよう命じる場合、その刑が犯罪者に与える不名誉は、絞首刑の有罪宣告よりも大きなものです。数年前、立派な君主が軍の先頭にいた将軍を仕置き棒でたたくということがありましたが、これによって将軍は回復不能な不名誉をこうむりました。[38] 君主が将軍を銃で撃ちぬいていたら、そのほうがずっと軽い処罰だったでしょう。名誉の法によれば、仕置き棒で打ち据えれば不名誉を与え、剣で打ち据えればそうはなりませんが、そこには明白な理由があるのです。

ジェントルマンは、不名誉を諸悪の最たるものと考えますから、わりあい軽いこんな処罰でもジェントルマンに加えられるならば、どんな処罰よりもおぞましい――情け深く高潔無私の人々の間では、そう考えられています。ですから、ジェントルマンの身分に属する人たちについては、その種の処罰はあまねく差し控えられ、法は多くの罪名によって彼らの命を奪いながらも、ほとんどすべての場合に彼らの名誉を尊重します。身分の高い人を鞭打ち刑にしたり、さらし台につないだりすることは、それがどんな罪名によろうとも、ロシア政府を除けば、ヨーロッパのいかなる政府もなしえない蛮行です。

10　勇敢な男が絞首台に引っ立てられることによって軽蔑の対象になることはありません。彼がそうなるのは、さらし台につながれることによってです。彼の態度は、絞首台で万人からあまねく敬意と賞賛を得られるかもしれませんが、さらし台ではいかにふるまっても心地よい対象になれません。

彼は、観衆から共感されるおかげで、絞首台で耐えることができ、屈辱感、つまり、「この不幸を感じるのは自分ひとりなのだ」という意識から救われますが、これこそ、すべての感情の中でもっともいたたまれないものです。一方、さらし台で共感は得られません。かりに共感されるとしても、彼の痛みは取るに足らないことですから、共感がよせられるのはその痛みでなく、「この痛みはだれからも共感されない」という彼の意識に対してです。共感は、彼の屈辱感によせられるのであって、彼の悲しみにではありません。彼を見て身につまされる人たちは、彼を前にして赤面し・うなだれます。彼も同様にうなだれて、自分は犯した罪によって面目を失わなかったが、科された刑によって回復できないほど面目をつぶされたと自分でも感じます。

これとは逆に、決然と死に赴く人は、敬意と是認のこもる面持ちでまっすぐ見上げられるのが自然であり、しからば、彼は、自分でも同じく敢然とした面差しをたたえます。要するに、彼は、その犯罪によって他人からの尊敬を喪失しなければ、処罰によってそれを喪失することはありますまい。彼は、自分の境遇が軽蔑や嘲笑の的なのではないかと怪しんだりしませんし、彼の風貌は、完全な静けさをたたえるばかりか、勝利して得意な様子を帯びても適切であって許されます。

11　「大きな危険には魅力がある。なぜなら、たとえ失敗しても、なにがしかの栄光を手にするから。しかし生半可な危険にはただぞっとさせられるだけだ。なぜなら、失敗すれば必ず名声を失うから。」とレスの枢機卿は言っています。[39] 彼の格率は、たった今わたしが処罰について考察したのと同じ理由に基づいています。

（38）この挿話の典拠は確認できなかった。

（39）Jean François Paul de Gondi, Cardinal de Retz (1614-79), *Mémoires*, September 1648. また、一部が *Rhetoric* ii. 42 でも引用されている。

一一三

12　人間の美徳は、苦痛・貧困・危険・死よりも卓越しており、それらを見下すのに必死の努力はするまでもありません。しかし、不幸のなかで悪口や嘲笑にさらされたり、凱旋式に連行されたり、濡れ衣を着せられ・後ろ指をさされたりすると、人間の美徳は、そんな境遇でややもすると平静さを失うきらいがずっと強くあります。世人から受ける軽蔑に比べれば、ほかのどんな世上の害悪も楽に耐えられます。

第三章　わたしたちの道徳感情の腐敗について。それの原因は、金持ちと権門を賞賛する一方、貧しくうらぶれた生活条件の人たちを見下し、あるいは無視するという上記の心理的習性である。[40]

1　このように、わたしたちは、思わず金持ちや権力者を賞賛し、またほとんど崇拝するといってもよい心理的習性をもち、また、貧しくうらぶれた生活条件の人を見下し、少なくとも無視する心理的習性をもっています。これは、身分階層の別と社会秩序を打ち立て、これを維持するのに不可欠ではありますが、同時にまた、わたしたちの道徳感情を腐敗させる強力かつ最も普遍的な原因です。「富と上流身分は、知恵と美徳だけに注がれるのがふさわしい尊敬と賞賛の目でよく見られ、一方、貧困と無力は、悪徳と愚劣だけが軽蔑されるただ一つの適切な対象であるのに、しばしばきわめて不当に蔑視される。」これは、あらゆる時代の道徳学者が発してきた苦情です。

2　わたしたちは、尊敬に値することにも尊敬されることにも恋い焦がれ、軽蔑に値することにも軽蔑されることにもおののきます。しかし、世間に出ていけばすぐに気づくのですが、知恵と美徳は、尊敬される唯一の対象ではけっしてなく、悪徳と愚劣は、軽蔑される唯一の対象ではけっしてありません。世間は、知恵や美徳をそなえた人よりも、金持ちや権門に対して尊敬に満ちたまなざしを強く注ぎ、また、権力者の悪徳と愚劣は、潔白な人の貧困と無力よりも、見下されることがずっと少ないのをわたしたちはよく目にします。

世人の尊敬と賞賛に値し、それを獲得し味わい楽しむことは、野心と競争心が求める大きな目標です。二つの異なる道がわたし

たちの眼前には呈示され、それらはいずれも等しく、この無性に欲望をそそる目標の獲得に向かって伸びています。ひとつは、知恵を研究し、美徳を実践することによって、もうひとつは、富と上流身分を獲得することによって、その目標に到達する道程です。二つの異なる人柄がわたしたちの競争心の前に呈示されています。ひとつは、うぬぼれた野心をもち、熱心なさまをひけらかす人柄であり、もうひとつは、謙虚な慎みと衡平を慮る正義をそなえた人柄です。わたしたちが自分の人柄と態度を成型するふたつの異なる手本、ふたつの違った絵が眼前に展示されています。ひとつは、色づかいがけばけばしくギラつく彩色画、もうひとつは、線がきちんとしてえもいわれず美しい線描画、いいかえると、ひとつは、そぞろ歩くどんな鑑賞者の注目も集めずにはおかない押しの強い作品、もうひとつは、丹念に細心の注意を払う鑑賞者以外の関心を引かない作品です。そんな鑑賞者は、もっぱら知恵と美徳をそなえた選りすぐりの人たちであって、数こそ一握りにすぎないのではないかと思いますが、知恵と美徳を心の底から迷わず賞賛する人たちです。

世間の大衆は、富と上流身分の賞賛者・崇拝者ですし、また、これよりもっと常識はずれの言い分と思われるかもしれませんが、彼らはきわめて多くの場合、私利私欲を離れた賞賛者・崇拝者です。[cf. I. iii. 2. 3]

3　わたしたちが知恵と美徳に対して感じる尊敬の念は、富と上流身分に対していだく感情とはたしかに違っています。この違いを見分けるのに特にすぐれた鑑定眼は要りません。しかし、こうした違いにもかかわらず、それらの感情は互いに酷似しており、たしかに、個々の目鼻立ちには違ったところがありますが、表情の全般的な雰囲気は、ほとんど瓜二つであると思われ、ぼんやり見ている人はややもすると一方を他方と取り違えるきらいが強くあります。

4　金持ち・上流身分の人の功労が、貧者・下層身分の人の功労と同じ程度であれば、前者を後者より重んじない人はまずいませ

（40）この章は第六版で追加されたが、これと差し替えられた元の文章は、ストア哲学についての議論であり、この論題を扱うほかの章句を添え、VII. ii. 1. 15-47として再構成されている。

ん。大抵の人は、前者の身の程知らずと見栄を、後者の真の堅実な功労よりもずっと高く賞賛します。「功労・美徳を分離して抽出された純然たる富と上流身分が、わたしたちの尊敬に値するのだ」という言い方は、おそらく、善良な習俗には不快であり、丁寧な言葉遣いからしてもぶしつけであるにちがいありません。しかし、富と上流身分がほとんど絶えずわたしたちの尊敬を勝ち得、したがって、若干の点では尊敬される自然な対象と考えられてよいということは承認されなければなりません。

たしかに、そんな高貴な地位身分が、悪徳と愚劣さのせいですっかり地に堕ちることはありえます。けれども、その悪徳と愚劣さは、相当ひどくなくては高貴な地位身分をそこまで完全に失墜させることはできません。上流社会の人が浪費しても、それに向けられる軽蔑と嫌悪は、うらぶれた生活条件の人が浪費する場合よりずっと弱いものです。うらぶれた生活条件の人は、節制と適切さの準則を一度でも踏みにじれば、こっぴどくやられるのが普通であるのに、上流社会の人は、その準則を絶えず公然と軽蔑しているのに、さほど強い憤りをぶつけられることはありません。

5　中流身分とそれ以下の暮らし向きでは、幸せなことに大抵の場合、美徳に通ずる道は、財貨に通ずる道と重なり、少なくとも、そんな暮らし向きの人々が常識的に期待してよい程度の財貨を獲得する道とは、ほとんど重なり合っています。

中流とそれ以下のどんな職業でも、真の堅実な職業的技能は、ふるまいの慎重さ・正義・不撓不屈・禁欲と相まてば、成功を逸することはまずありません。ふるまいがまったく正しくなくても、技能が力を示すことは一度や二度はあるでしょう。しかし、日頃から目先が利かず、不正義に慣れ、気弱が身について、浪費に明け暮れるなら、どんなに華々しい職業的技能も常に鈍り、時にはまったく使い物にならなくなるでしょう。

さらに、中流身分とそれ以下の暮らし向きの人々は、法律の上に立てるほどの権門ではありえません。というのは、法律は、おしなべて彼らを神妙にさせてある種の尊敬の念をいだかせ、少なくとも、比較的重要な正義の準則についてはそうであるにちがいないからです。また、そんな人々の成功は、ほとんどいつも隣人と同格市民からの好意と好評を拠り所にしています。これらは、それなりに紀律正しくふるまっていなければ、まず手に入れられません。

ですから、このような条件の境遇にあって、古き良き格言、「思無邪、これ達成の妙境なり（honesty is the best policy）」は、ほ

とんどいつも完全に真理として妥当します。したがって、そんな境遇では、一般に相当程度の美徳を期待してよく、また、社会の善良な習俗のためには好運なことですが、世人の圧倒的多数はそんな境遇にいます。

6　不幸なことですが、以上のことは、上流身分の暮らし向きにそのまま当てはまるとは限りません。君主の宮廷や権門の応接室で成功と昇任を左右するのは、分別があり事情に通じた同僚の敬意でなく、無知で身の程知らずのうぬぼれた上司がする・事実に基づかない愚かなひいきです。また、追従と虚言が、功労と技能を打ち負かすこともざらにあります。こんな人々の集まりでは、楽しませる技能が、仕事をする技能よりも重んじられます。平穏・泰平の時代にあって騒乱は遠ざかり、君主や権門が望むのは、楽しませてもらうことばかりで、ややもすると、「自分はだれからも仕事をしてもらう必要がほとんどない」とか、「自分を楽しませてくれる人には仕事をしてくれる十分な力量がある」と夢想するきらいさえあります。

洒落者と呼ばれるずうずうしくて愚かな輩が身につける外面的なたしなみや浅薄な素養は、軍人・政治家・哲学者・立法者の堅実で男らしい美徳よりも高く賞賛されるのが普通です。横柄な下っ端の追従者が、そんな腐敗した人々の集まりで真っ先に頭角を現すのは珍しくありませんが、彼らの理解では、偉大で威光を放つあらゆる美徳、評議会や元老院や戦場にふさわしいすべての美徳は、とことん軽蔑・嘲笑される代物です。

シュリー公爵がルイ一三世に招喚され、重大な非常事態に際して助言を求められたことがありました。そのとき、彼は、寵臣・廷臣らが互いにヒソヒソ話し、彼の流行遅れのいでたちを見てクスクス笑うのを見て取りました。この老軍人政治家は、「陛下の父君が私に言上の栄誉を賜るときにはいつも、宮廷の道化どもに命じて控えの間に下がらせました。」と述べました。[41]

7　わたしたちには金持ちや権門を賞賛し、あげくに、その真似をする心理的習性があり、これこそ、いわゆる流行を決定したり

(41) Maximilien de Béthune, duc de Sully (1559-1641), アンリ四世治下の偉大な大臣であったが、後継のルイ一三世によって第一線から外された。言及されているのは、Sully の回想録 *Économies royales d'état, domestiques, politiques et militaires*, 4 vols., 1634-62, vol. 4 (in *Mémoires du Duc de Sully*, 6 volumes (Paris, 1827), VI : 186.)

先導したりする力を金持ちや権門に与えている原因です。その衣服は流行の衣服であり、その会話の言葉遣いは流行の口調であり、その風貌と所作は流行の態度です。

彼らの悪徳と愚かさですら流行し、大方の人が鼻高々に彼らをまね、似せようとするまさにその資質こそ、まねる側の名誉を傷つけ、落ちぶれさせるものです。見栄を張る人たちは、しきりに流行に乗って浪費する風を装いますが、内心では、この浪費を是認しておらず、おそらく本当は彼らに浪費の罪はありません。彼らは、自分では賛辞に値すると思わないことのために褒められたいと念じる一方、恥ずかしいとは思いながら人目を忍んで流行遅れの美徳を実践することもあり、そんな美徳をこっそりと多少は心から恭しく奉っています。

富と上流身分をもたないのにそれを偽装する人もいれば、宗教心と美徳をもたないのにそれを偽装する人もいます。見栄を張る人間は、ややもすると自分でない者になりすまそうとするきらいがあり、やりかたこそ違いますが、悪知恵が働く人も、別人を装おうとするきらいがあります。

見栄を張る人は、装身具で飾り立てた華麗な上司の暮らしぶりを装いますけれども、上司の行いが賛辞に値する場合の功労と適切さはどれも、「出費を迫りかつそれを楽にまかなえる境遇と財貨に似つかわしい」という理由から生ずるのに、そこに頭が回りません。多くの貧者は、皆から金持ちと思われることに自分の栄光があると見定め、金持ちだという評判を取るといやおうなく果たさねばならない諸々の義務（そんな愚行をまこと深遠な威厳のあるこの名称で呼ぶことが許されるとすればですが）のせいで、たちまち無一文になり、彼らの境遇は、賞賛して真似た相手の境遇とは当初も違っていましたが、ますます似ても似つかなくなるにちがいないのに、そこに考えが及びません。

8　うらやましがられるこの境遇に到達しようと、財貨を競って名乗りをあげる人たちは、あまりにも頻々と美徳の道を放棄します。なぜなら、不幸なことですが、時により一方の目標に通ずる道は、他方の目標に通ずる道と正反対の方角に敷かれているからです。しかし、野心家は、「自分が駆け上がる華々しい境遇では、世人の尊敬と賞賛を勝ち得るまこと多くの手段が手に入り、自分の行動には卓越した適切さと気品が与えられ、将来のふるまいが放つ輝きは、この高みに至る道行きの汚らしさを完全に覆い隠

すか、拭い去るだろう」とうぬぼれます。

多くの政府にあって、最高の地位身分を競って名乗りをあげる人たちは、法律に縛られません。彼らがその野心の目標を達成する暁には、それを手に入れるために使った手段について問責される心配はありません。ですから、しばしば彼らは、詐欺・虚言といった陰謀・権謀の常套手段を使うばかりか、殺人や暗殺、反乱や内戦といった凶悪きわまりない犯罪をしでかし、自分たちが権門になる途上で反発し・立ちはだかる人たちを根絶し、破滅させようと努めます。彼らは大抵、成功するよりも失敗し、その犯罪にふさわしい不名誉な刑罰のほかには何も得られないのがふつうです。

しかしです。彼らは、たとえ望みどおりの上流身分を運よく手に入れるとしても、そこで味わえると期待した幸福に失望するのが常であって不幸のきわみです。野心家が本気で追いかけるのは、くつろぎや楽しみでなく、いつでも名誉であり、その理解は大抵ひどくいびつですが、ともかく何らかの種類の名誉ではあります。ところが、自分の目にも他人の目にも、彼の高貴な地位身分に属する名誉は、そこまでのし上がるために使った手段の悪質さによって汚れ・不潔であると映ります。彼は、どんなことにも気前よく金をばら撒き、あらゆる遊蕩の悦楽にどっぷり浸って、すさんだ人柄が好む・下劣だが常套の手段に訴えたり、また、あわただしく公共事業を起こし、あるいはそれより誉れ高く目もくらむ戦争のどさくさに訴えたりして、わが胸の記憶からも他人の記憶からも、自らの悪行の思い出を拭い去ろうと努めるかもしれません。けれども、その思い出は、彼を追いかける手を決して休めません。

健忘と風化の暗く不気味な力にすがっても彼に御利益はありません［cf. I. i. 1. 13］。自らの所業は自分では思い出すわけであって、その思い出が、「ほかの人もその悪行をお前と同じように思い出すにきまっている」と彼に告げます。威風をこれ見よがしにひけらかす絢爛豪華な古式に列席し、権門や才人から欲得ずくのいかがわしい追従でちやほやされ、それよりは罪がないけれどもばかばかしさでは一枚上の大歓声を庶民から浴び、征服に得意満面になって戦勝の凱旋式に臨みながら、なおも彼は、人知れず屈辱や悔恨の情によって激しく討伐の追っ手を差し向けられます。つまり、栄光は彼を四方から取り囲むように思われるのに、その間、彼自身は脳裏に浮かぶ想像のなかで、不吉で汚らしい悪名が足早に自分を追いかけ、背後から取りすがろうと虎視眈々と隙を窺うのを見るのです。

一一九

偉大なカエサルには、護衛を遠ざける矜恃がありましたが、その彼でさえ疑心暗鬼を払いのけることはできませんでした。パルサロスの思い出が相変わらず付きまとい、彼を追いかけたのです。彼は元老院の要請でマルケッルスに恩赦を与えて高潔無私を示したとき、元老院にこう告げました。「私は自分の命をねらって進められている計画を知らないわけではないが、私の生きてきた歳月は、天寿を全うしたといえるだけ長く、かつ、栄光を充分味わったといえるだけ長いものであったから、死んでも悔いはない。だから、一切の共謀を歯牙にもかけないのだ。」[42]おそらく、彼の生きてきた歳月は、天寿を全うしたといえるほど長いものでした。しかし、彼は、わが身が、あんなにも殺意を固めた憤りの標的であると感じており、その憤りを彼にぶつけるのは、彼が支援してもらいたい人たち、いまも自分の味方であると考えたくてたまらない人たちだったのです。真の栄光、あらゆる幸福は、同格市民から寄せられる愛情と敬意につつまれているかぎり、味わうことがいつでも期待できたものなのに、その時期を超えて生きた彼は長生きしすぎた、というのが本当のところでしょう。

（やまもと・よういち　法学部教授）

---

(42) スミスが言及する挿話は、紀元前四〇年代にカエサルと、ポンペイウス率いる共和主義者の貴族諸勢力とのあいだで戦われたローマの内戦期間の出来事である。結局、カエサルは、紀元前四八年、テッサリアのファルサリアにある都市ファルサロスにおいて辛勝し、終身の独裁官になった。Marcus Claudius Marcellus は、紀元前五一年に執政官であり、カエサルの政敵であったが、カエサルが支配権を握ると Mytilene に隠遁していたところ、カエサルに呼び戻された。カエサルのこの行動は、元老院からの支援をつなぎとめておくための政略の一部であったが、キケロの *pro Marcello* で称賛された。スミスはこの作品から、キケロがカエサルを引用している章句（viii. 25）を抜き書きして翻案している。